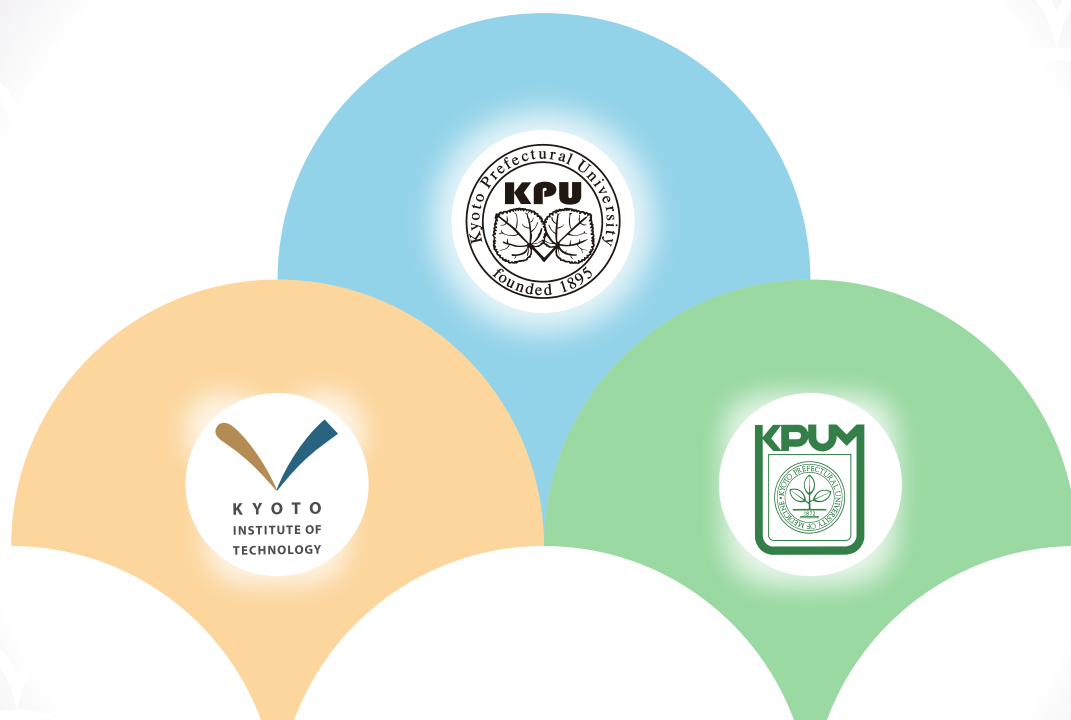


京都三大学教養教育共同化事業

平成30年度 報告書

時代が求める新たな教養教育



京都三大学教養教育研究・推進機構

目 次

京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践	2
--------------------------------------	---

ごあいさつ

京都府立大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	3
京都工芸繊維大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	4
京都府立医科大学	学長・副学長あいさつ、大学紹介	5

第1部 教養教育共同化の展開

(1) 平成30年度取組の到達点（機構運営委員長 総括コメント）	6
(2) 平成30年三大学教養教育共同化の取組	9

第2部 時代が求める新たな教養教育像の探求

(1) 平成30年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して	14
(2) 教育IRセンターからの総合報告－2018年度（平成30年度）－	16
(3) 京都三大学学生企画講演会「山田洋次監督特別講義『映画をつくる』報告	22
(4) 平成30年度 京都三大学教養教育共同化事業 宿泊研修報告	25

第3部 共同化科目の授業研究

(1) 三大学教養教育共同化へのこれまでの関わり（科目名：生物学的人間学 ほか）	30
(2) 法学の授業を担当しての雑感（科目名：法学）	33
(3) 多様性を体感する（科目名：映画で学ぶ英語と文化）	35
(4) 「読書感想文」で何を体験し育てるのか（科目名：文芸創作論）	38
(5) 反転授業による社会科教育の実践－「君たちはどう生きるか」を教材にして－ （科目名：社会科学の学び方）	41

資料編

(1) 平成30年度京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿	44
(2) 会議の審議状況	44
京都三大学教養教育研究・推進機構 授業アンケート（様式）	46
京都三大学教養教育研究・推進機構 1年次生アンケート（様式）	47

京都三大学 教養教育共同化による 「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践

背景

地球環境の危機や一地域の変化が全世界の人々に影響を与えるほどのグローバル化の進展により、社会全体の枠組みが大きくかつ急激に変化している。

加えて、東日本大震災は多くの尊い命を奪い、生活や産業に深刻な打撃を与えるとともに、それに併発した原子力発電所の事故は暮らしとエネルギーの問題を投げかけるなど、国民全体が幸福感や社会関係のあり方を深く問い直す状況が広がっている。

また一方、被災地では、住民同士の助け合いや国内外からのボランティアによる救援・復興活動が展開されており、「人を思いやる心」や「人と人との絆の大切さ」が再認識されている。

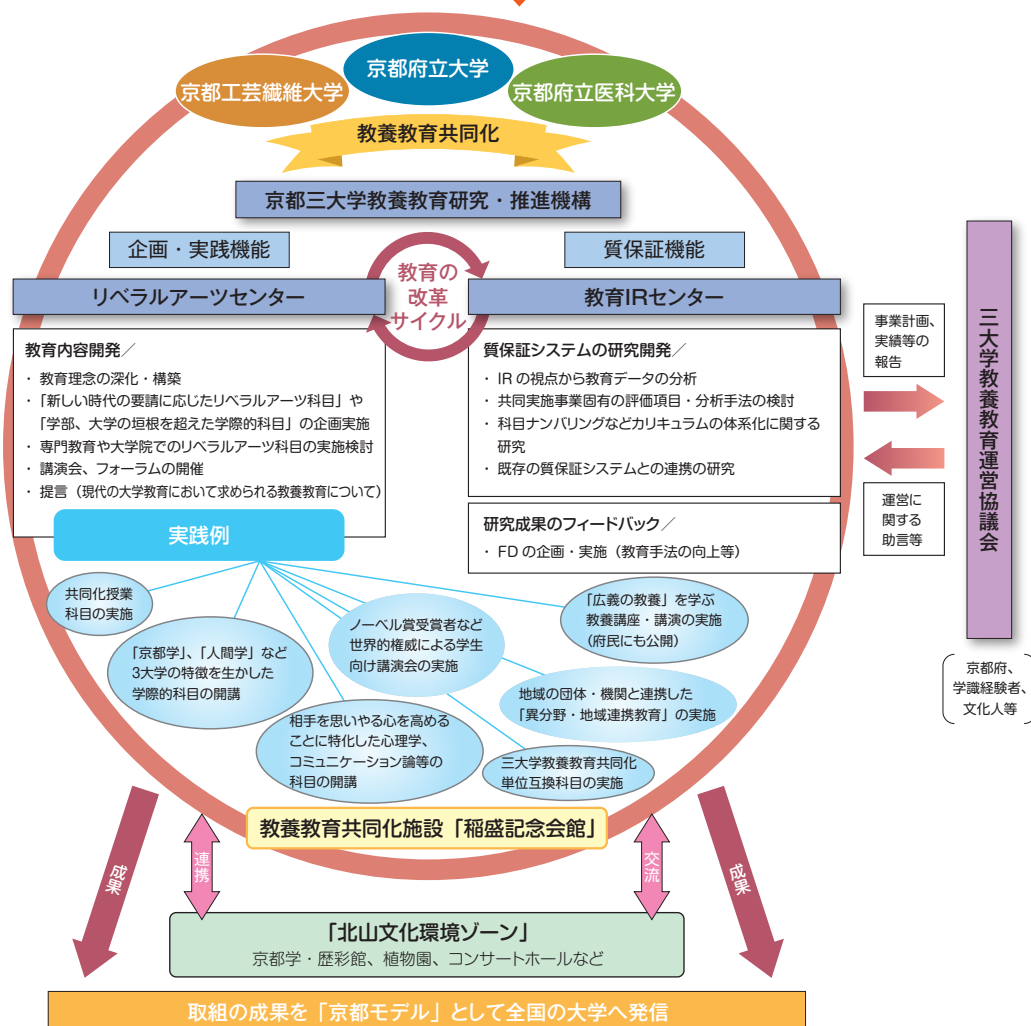
取組コンセプト

国公立三大学の教養教育カリキュラムを「共同化」し、それぞれの大学の特徴・強みを生かした質の高い、「新しい時代の要請に応じた教養教育」を実施する。

人材養成の目標

次の①～③を備えた人材を養成する。

- ①異なる価値観や視点を持つ他者と協働する力としてのコミュニケーション能力及び相手を思いやる心
- ②自ら問題を発見し、それにコミットするとともに、「正解」の存在しない問題についても、学際的な視点に立ち、多様な見解を持つ他者との対話を通して自身の考えを深め、解決に向かって行動する能力
- ③グローバルな局面で、文化や言語を異にする他者と交流し協働する能力





京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治28年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発する創立120年以上の歴史を有する大学です。人文・社会・自然の諸分野にまたがる3学部・3研究科を備えた総合大学であり、教員・学生相互の密度の高いコミュニケーションをベースに、実験、実習、フィールドワークなど質の高い教育を実現しています。また、京都府の知の拠点として、京都地域未来創造センターが中心となり、高度かつ地域社会と密接に連携した研究、府内各地域の様々な課題に応える地域貢献活動や公開講座などを積極的に展開しています。

平成26年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、教養教育共同化施設「稻盛記念会館」で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。

また、平成31年4月には、和食文化の意義を的確に理解し、国内外で和食文化を継承・発信していく人材を育成するため、文学部和食文化学科を開設します。



学長あいさつ

京都府立大学学長

築山 崇



2018年度を振り返ってまず思い出されるのが、山田洋二監督を迎えての特別講義だと思います。リベラルアーツ・ゼミナール『現代社会と映画製作』からの発展ともいえますが、“混迷する時代に、自分たちはいかにして生き抜けばよいのか”という問題意識に発する学生有志のみなさんの思いが結実したものといった方がふさわしいと思います。当日は会場いっぱい受講者を前に、登壇した3人の企画学生のみなさんは、少々固くなっていたようですが、その固さをほぐすかのように、終盤での山田監督のことばは、「寅さん流に言えば、恋をしなさい」というメッセージでした。

「正解のない問題にどう取り組むか」という“問い”は、多様性を前提としつつも“解”を求めている問題であることには違いありません。多様性ということばの前に、すべてが相対化されてしまいがちな現代、正解はおろか出口も見つからない「恋の悩み」が持っている（かもしれない？）、青年を“おとな”へと導く不思議な力も“再発見”されてしかるべきという気がします。不格好な、でも寅さん流の人間的な生き方を邪魔しない、そんなやわらかな「教養」も身につけていってほしいと思います。

副学長あいさつ

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長

石田 昭人

今年度から機構運営委員長の大役を仰せつかることとなった。共同化の立ち上げ段階から参画してきたとはいえ、これまではEIRCやLACでそれぞれの業務を行う立場であったのが、全体を俯瞰して課題を見据えつつ、将来展望も考えねばならないことになり、正直のところ務められる自信はあまりなかった。特に、今年から府立大学ではCAP制が実施され、学生の履修に大きな変化が生じることが予想され、混乱が生じるのではないかと懸念があった。幸い、府立大学の履修者は若干減少したものの、工芸繊維大学の履修者は増加し、全体としてのバランスは良くなった。また、新たに設計した科目の実施や、次年度に向けたカリキュラムの洗練も行ってきた。さらに、学生主体の活動として、山田洋次監督の特別講義や、丹後地区での宿泊研修も行うことができた。一定以上の成果を上げて年度を終えることが出来たのは、ひとえに前田工織大副学長、奥田医大副学長のご協力と、しっかりと両センターの活動を支えてくれた教員、そして、機構事務局はもちろん、三大学の事務担当者の皆様のご尽力の賜物であり、深く感謝したい。時の経つのは早いもので、共同化の理念構築に関わった教員が徐々に減ってきたことを実感しており、次の世代への引き継ぎが重要な課題となりつつある。当初の理念を大切に守りつつ、カリキュラムを洗練させていくためにも、三大学教員の積極的な参画をお願いしたい。



京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学は、明治時代の工業化や伝統産業の近代化に対応するために設立された京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発します。時代の進展とともに110余年にわたり発展を遂げながら、伝統文化の源である古都の風土の中で、「知と美と技」を探究する独自の学風を築き上げてきました。この栄光ある歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性にもとづく技術の創造をめざして技を極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信しています。

本学の特色としては、ものづくりを基盤とした「人に優しい実学」を目指した個性ある教育研究を行っているところです。



学長あいさつ

京都工芸繊維大学学長

森迫 清貴



3大学連携による教養教育の共同化事業を大きく発展させたことには、二つの要素があります。一つは、平成24年度に、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業の補助金に採択されたことであります。これにより、教養教育の共同カリキュラムを構築する上で、財政的な支援を受けることができました。また、京都三大学教養教育研究・推進機構が中心となり、学年暦や受講登録、成績管理の方法など教養教育を共同して実施するにあたって必要となる具体的な事項に関して、3大学で意見交換をすることができました。もう一つは、京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫様より御寄付があり、平成26年9月に教養教育共同化施設の建物が整備されたことであります。これにより、3大学の学生が同じ場所で共に学ぶ環境が整いました。稲盛様は勿論のこととして、ご調整していただきました関係各位にも、感謝の意を表したいと思います。

現代社会は、大量消費社会がもたらした資源の枯渇、地球規模の環境悪化、経済社会のグローバル化、頻発するテロや増え続ける難民など深刻な諸問題に直面しています。一方、日本国内においても急速に進む少子高齢化、格差の拡大などを背景として、私たちは様々な社会問題を抱えています。

このような状況下において大学は、すべての学生に自らが専攻する専門分野とは別に人文・社会・自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理

観や歴史観、国際的な視野を持たせる責務があります。

このことから本学では、人間形成に必要な教養を涵養し、科学技術と人間性との調和・融合を図ることができる広い視野と感性を備えた高度専門技術者を育成するための教育を実施してきました。今後も地域コミュニティの中核的存在として、様々な課題を解決することができる人材を輩出することが求められており、それに応える教育を実施していきます。

副学長あいさつ

京都工芸繊維大学理事・副学長

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

前田 耕治

昨今、学生には、専門的な知識・技術だけでなく、創造性、多様性、コミュニケーション能力、グローバルな素養などが求められ、まさに「教養教育」の重要性が高まっています。府立2大学と協力して平成26年度から始まった教養教育の共同化事業は、互いの特色を生かした約80科目に及ぶ幅広い学問を学ぶ機会だけでなく、講義からゼミナールまで多様な形態の中で、他大学の学生と机を並べて異なる学風を感じながら学ぶ機会も生み出してきました。現代社会の要請に応えるだけでなく、普遍的に意義のある教養教育となりつつあります。今後も本事業を発展させて、3大学が協力して持続可能な共同化の体制づくりに努めます。



京都府立医科大学

京都府立医科大学は、1872（明治5）年に開設された京都療病院での医学教育を始まりとする我が国で最も古い医科大学の一つで、2022年に大学創立150周年を迎えます。

本学では、歴史と実績によって培われた医学・医療技術や高い倫理観を身につけ、患者の立場に立って考える優れた医療人を養成しています。また、多様な学際的研究活動を推進し、次代をリードする指導的人材を育成しています。

本学は、京都府民に開かれた公立大学として、地域医療への理解と使命感を持った医療人を育成・確保するとともに、大学の理念「世界トップレベルの医学を地域へ」の下、最先端の研究を治療に活かす取組や府民等の健康増進に寄与するなど、大学の成果を府民に還元するよう努めています。



学長あいさつ

京都府立医科大学学長

竹中 洋



本学では、単なる医師・研究者ではなく、社会に貢献できる指導者としての人材を輩出することが使命であると考えており、これまで一貫して、基礎教育と専門教育との連携を重視してきました。幅広い教養を身につけることは、患者さんの悩みや痛みがわかる人間性豊かな医療人となるためや研究の幅を拓き質を高めるためには、とても大切なことであります。

京都工芸繊維大学、京都府立大学及び本学の三大学が、それぞれの強みと特徴を活かした教養科目を提供しあう教養教育共同化は、本学の学生にとって、より幅広い教養教育の機会を得られるだけでなく、専攻分野や将来の志望の異なる個性との交流を通じて多角的な視点を養い、多彩な価値観の発見と理解につながる、非常に意義深い取り組みとなっています。

本学は、教育・研究・診療それぞれの分野で、「世界トップレベルの医学を地域へ」という理念に恥じない実績を挙げていますが、最先端がん治療研究センターでの治療開始などを通じて、地域医療へのより一層の貢献を今後も進めてまいります。この三大学教養教育共同化の取組により、新しい飛躍を担う有為な人材が育ってくれることを、大いに期待しています。

副学長あいさつ

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員

奥田 司

文部科学省の支援を得て平成26年度に始まった、三大学教養教育共同化事業による教育プログラムは、平成29年度からは京都工芸繊維大学、京都府立大学及び本学の独自共同予算による運営となり、大学間連携のモデル事業として全国的に高い評価を受けながら、今年で5年が経過することになりました。

専門性の高い単科大学では、所属する学生は専門領域の殻の中に閉じこもりがちですが、本学は、この三大学教養教育共同化の実施により、学生は三大学それぞれの特長ある教養講義科目を幅広く選択受講できるだけでなく、リベラルアーツゼミナール科目の受講等を通じ、専攻科目や学修目標の異なるさまざまな学生たちと交流することが可能です。学生諸君には、こうした機会を最大限に活用して、積極的に交流することで豊かな人間性を築き、大きく成長してもらいたいと思います。

また、本学では平成29年度から「医学概論」を提供していますが、非医学系の学生を対象に、本学が誇る専門講師陣により、医学の基礎・現状についてわかりやすく紹介しており、他ではあまり例を見ないユニークな講義となっています。工芸繊維大学、府立大学の学生の皆さんにはぜひ多数受講いただき、この機会に本学の医学マインドに触れていただきますよう御案内申し上げます。

(1) 平成30年度取組の到達点 (機構運営委員長 総括コメント)

京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員長
京都府立大学副学長

石田 昭人

早いもので文科省事業が終了して2年目となり、本年度は「持続可能な自主運営」を軌道に乗せるべく、限られた予算の中で最小限の労力と時間で最大限の成果を達成できるよう、三大学が力を合わせて機構の運営と教育にあたった。以下に本年度の取組とその成果を概説する。

1) 「持続可能な自主運営」 のための体制構築

本共同化は文科省の大学間連携共同教育推進事業として採択・開始されたものであり、事業期間中は当然ながら必要十分な予算が確保されていた。しかし、昨今のこの種の事業の常として、事業終了後も自己負担による取組の継続が強く求められており、本共同化においてもそれを念頭に事業期間中から三大学による自主的な運営に向けた準備を進めてきた。たとえば、教育内容については事業期間中は共同化の目的の一つであった幅広い教養教育を実現するため科目数の拡充を進めてきたが、満足できる水準に到達したこともあり、数から質、すなわちカリキュラムの洗練にシフトする検討を進めてきた。運営面においても、事業開始直後は共同化の理念や制度の構築にあたって研究や議論を十分重ねる必要があったために運営委員会のほかに外部からの評価や助言を求めるための運営協議会や研究会を開催してきたが、定常的な運営が可能となるにともなってそれらの簡素化にも順次努めてきた。事業が終了した昨年度からはより具体的なスリム化の検討に入り、本年度は予算関係の徹底的な見直しを前提とした「持続可能な自主運営」に向けた体制の構築に力を注いだ。

まず、予算については予算案策定時に一つ一つの項目について徹底的な見直しを行い、ぎりぎり

のところまで切り詰めた。とはいえ、文科省事業の最終評価でS評価をいただいた教育内容や水準を低下させる訳にはいかないので、学生主体の講演会や宿泊研修など事業期間内で成果を上げて高評価を受けた行事については本年度に限ってなんとか実現できるよう尽力し、今後の展望を考えていくための礎とした。

運営関係では、これまで月1回のペースで定期的に開催されてきた運営委員会を必要に応じて開催することとし、三大学の担当者の負担を軽減した。学期始めや年度末には審議・決定事項が多々発生するのに対して、それ以外の時期には開催する必要性が低くなる経験に基づいた改革である。このような運営体制の簡素化の一方で、共同化の要ともいえる両センターについては別項で報告されるように、これまでの実績を踏襲するだけでなく、さらに洗練された活動が活発に行われた。このように、年度当初に意図していた通りのメリハリの取れた運営と持続可能な体制の構築が行えたと思われる。

2) 教育内容の洗練と充実

カリキュラムに関しては1科目をゼミナールに変更するとともに、新たな科目を設計・開講した。「意外と知らない植物の世界」は最も人気のある講義の一つであったが、植物園などにおける実体験を通じた授業を行う上でも通常の講義では運営が難しいこともあり、ゼミナール科目とした。また、同じく人気講義ではあるものの大人数では授業運営が難しい講義については定員の絞り込みを今後検討していく予定である。新たに設計・開講した科目は「法学」、「レーザで測る、創る、楽しむ」、「京都の防災と府民」の3つである。こ

のうち「法学」はこれまで共同化科目には無かった法律分野の講義であり、過去の運営協議会における有識者からの助言をもとに実現したものである。「レーザで測る、創る、楽しむ」はゼミナール科目で、高度な専門的内容を教養教育に活かす典型例となってくれたものと思われ、今後、この実績に触発されて三大学の教員が教養教育に積極的に参画してくれることが期待される。一方、「京都の防災と府民」は満を持して開講した三大学教員によるリレー講義科目で、災害史と防災計画、耐震建築、治山治水といった技術的な内容から、災害時の医療・看護、さらには防災行政やボランティアまで、担当する三大学教員のそれぞれの持ち味を十分に活かした共同化ならではの科目であるといえる。最近、地震、水害、台風といった災害が立て続けに近畿地方を襲ったこともあり、学生の関心は非常に高かったようで、多数の受講者が真剣に耳を傾けてくれた。今後もこのような共同化でしか為し得ない特徴ある科目の設計をリベラルアーツセンターで進めていきたい。

課題としては、学生アンケートで指摘された2点を挙げておきたい。1点目は毎年不評意見が出される抽選制度である。本共同化はマスプロ教育を排することを趣旨として定員を設けているため、定員を超えた場合は抽選で受講者を選ぶことになる。抽選の方法自体はこれまで数回にわたる改善の結果極めて公平で無駄の無いものとなっているが、抽選を適用することの本質的な欠点が解消されていない。すなわち、履修意欲が極めて高いにもかかわらず抽選に外れて受講できず涙を飲む学生が居る一方で、たまたま当選したものの意欲が低く、居眠りや私語で授業の雰囲気低下させている学生が居る実情に対する厳しい批判が今年も学生アンケートで散見された。履修登録決定前に

講義内容を聴くような「お試し期間」を置くことは履修登録期間に余裕がないため難しい。また、当初は興味が低くとも内容を知るにつれて意欲が高まることもよくあるわけで、登録時の履修意欲の高低で受講者を判別したり一概に排除したりすることは許されまい。一方で、毎年のように学生から批判があることから何らかの対策を考えて行かねばならないであろう。これは共同化のみならず、教養教育の根源的な課題の一つであり、教育IRセンターを中心に対応策を考えていきたい。2点目は、1回目の講義で科目のガイダンスを行い、その上で履修登録を行うことから、履修登録が完了するまでは履修者が確定しないため、2回目の講義で初めて受講する学生がかなりの数に上ることである。そのため、2回目の講義ではどうしても1回目とほとんど同じ内容を繰り返さざるを得ないことになり、最初から受講していた学生には不満が生じることになる。これについても、教員への周知を含めた具体的な対応を考えていきたい。



3) 各種行事

学生主体の行事としては「寅さん」シリーズで有名な山田洋次監督による特別講義と丹後地域での宿泊研修を行った。山田監督の特別講義はゼミナール科目「現代社会と映画製作」の受講生を中心とする学生達が当該科目を担当していただいた長坂勉氏の御紹介と御助言を得ながら実現したもので、学生達は過去の山田監督の作品を鑑賞・読み解いたうえで監督に問いを投げかける対談形式で行うこととし、その内容の構成はもちろん、ポスター作りや集客、当日の運営に至るまで準備を重ね、大講義室を満席にする盛況の中、監督から

過分のお褒めをいただき成功裏に終えることができた。学生主体の行事とはいえ、1年以上にわたって機構事務局が学生達に寄り添い事細かに援助を行ってくれたことを特記しておきたい。一方、宿泊研修のほうは京都工芸繊維大学の京丹後キャンパスを利用することとし、2日間にわたって丹後地域の生活と産業の課題を実体験から学び、提言を行った。岡本リベラルアーツセンター長と播磨特任教授が同行し、今回もファシリテーターを引き受けてくれたボノ株式会社の谷津様と共に学生達をうまく導いてくれた。詳細は別項に譲るが、参加した学生達の向上は目を見張るものがあり、かけがえのない体験になったと思われる。

教員の行事としては共同化科目担当者会議を例年通り開催し、学生アンケートの結果や授業の実施方法などに対する問題提起など活発な意見交換が行われた。

以上がこの一年の機構の主な取組であるが、無駄を排しつつメリハリの取れた活動を行うことができ、持続可能な自主運営のスタートが切れたと思われる。これは三大学の御理解と御協力の賜であり、改めて感謝するとともに、来期も一層の努力を継続していきたい。

(2) 平成30年度三大学教養教育共同化の取組

共同化教養教育等の概要

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の京都三大学による共同化授業が平成26年4月に始められ、今年度で5年目を迎える。文部科学省の大学間連携共同教育推進事業補助金を受けての運営を経て、事業費を三大学で相互に負担しながらの独自事業としての取組も今年度で2年目となった。

三大学での共同化教養教育は、個々には規模が小さく、各大学で提供できる科目に限りがあるため、各大学の強みと特徴を生かした教養科目を相互に提供し、提供されたすべての科目を各大学が自大学の科目とすることによって、学生の科目選択の幅を大きく増やし、学修意欲を高めようとするものである。

文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望が異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を持つ学生と一緒に学び交流することを通じ、豊かな人間性の形成に資することもねらいとしている。平成26年夏に、京都府立大学下鴨キャンパス内に教養教育共同化施設「稲盛記念会館」が整備され、同年後期授業からは同施設が教養教育の拠点となり、学生間交流に大きく寄与してきている。

今年度も三大学で協議の上、共通の学年暦を定め、前期は4月9日(月)から7月30日(月)(試験日を含む)、後期は10月1日(月)から2月4日(月)(試験日を含む)とし、毎週月曜日に開講した。共同化開始当初から開講していた3～5コースに加え、昨年度から開始した月曜日午前の共同化授業も引き続き6科目開講した。

このほか、例年取り組んでいる集中講義を、夏期と冬期休業期間中を中心に8科目開講した。

また、三大学教養教育共同化が展開される以前から三大学間で実施されていた単位互換制度については、三大学合わせて37科目とした。

平成30年度共同化カリキュラムの概要

平成30年度は、共同化科目として82科目を開講した。昨年度に比べると2科目の増、共同化開始年度である平成26年度とでは14科目増

加したこととなる。科目群別では、「人間と文化」29科目、「人間と社会」26科目、「人間と自然」27科目と、諸分野をバランスよく提供することに努めた。

82科目を提供大学別にみると、京都工芸繊維大学が31科目、京都府立大学が25科目、京都府立医科大学が12科目、機構が14科目となる。

この結果、共同化開始前に比べ学生の科目選択幅は、各大学により異なるものの、2.3倍～5.3倍に大きく拡大した。

共同化事業開始当初から取り組んでいる『京都学』科目は、16科目開講した。昨年度より1科目増やし、今年度新設した三大学の教員による「防災」をテーマとしたリレー形式での授業「京都の防災と府民」など機構提供科目を3科目開講したほか、京都工芸繊維大学が2科目、京都府立大学が10科目、京都府立医科大学が1科目担当し、各大学の専門性を生かした多様な『京都学』科目を提供した。

また、少人数で学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした「リベラルアーツ・ゼミナール」は、「レーザで測る、創る、楽しむ」の新設、「意外と知らない植物の世界」のリベラルアーツ・ゼミナール化により、昨年度より2科目増やし、13科目開講した。考え方や学び方の基礎力を培う授業やグローバルな視野を広げる集中講義、アクティブラーニングを取り入れたゼミナールなど、多彩な内容を提供している。

学び続ける教養教育の一環で、平成27年度から取り組んでいる上回生を対象とした高度教養教育科目については8科目、語学・異文化理解科目についても7科目を、昨年度と同じく開講した。

更には、教養教育共同化施設に隣接する京都府立植物園と連携した「意外と知らない植物の世界」などフィールドワークを取り入れた科目も4科目開講したほか、「人間と社会」分野の拡充として「法学」も新たに開講した。

履修登録の状況

平成30年度前期の共同化科目は42科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が16科目、京都府立大学が15科目、京都府立医科大学が5

科目、機構が6科目である。また、42科目中、6科目は夏期集中講義科目として開講し、1科目は4月～7月にかけて開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成30年度前期）」のとおりである。履修登録者総数が4,689人で、大学別では、京都工芸繊維大学が2,686人、京都府立大学が1,410人、京都府立医科大学が593人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は2,391人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）4,467人に占める割合は53.5%であった。

次に、後期の共同化科目は40科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が15科目、京都府立大学が10科目、京都府立医科大学が7科目、機構が8科目である。また、40科目中1科目は、冬期集中講義科目として開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成30年度後期）」のとおりである。履修登録者総数が3,325人で、大学別では、京都工芸繊維大学が1,854人、京都府立大学が1,316人、京都府立医科大学が155人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は1,467人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）2,912人に占める割合は50.4%であった。

これらの結果、前期と後期を合わせた通年での履修者総数は8,014人で、前年度に比べ311人増加（+4.0%）した。

大学別では、京都工芸繊維大学が対前年度900人増加（+24.7%）。京都府立大学が642人減少（-19.1%）。京都府立医科大学が53人増加（+7.6%）という結果であった。

また、通年で三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は3,858人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）7,379人に占める割合は52.3%にのぼり、前期・後期・通年の全てにおいて、共同化開始以来初めて50パーセントを超えた。



履修定員調整

教養教育共同化施設の整備に当たっては、マスプロ教育を避けるために教室規模を最大200人程度とされたこともあり、科目ごとにあらかじめ履修定員を設定の上、授業を実施している。そのため、各科目において大学ごとに定員の配分を行い、定員を超える履修希望があった場合は抽選となるが、配分に当たっては、まずは、科目定員の半数を科目提供大学が、残りの半数をその他2校で1年生の学年定員数に応じ配分することを原則としている。

その上で、学生の履修希望を受け付け、科目ごとに各大学の履修希望数を集約し、定員に余剰が生じた大学があった場合には、その余剰分を他の大学に再配分するなどの工夫を行うことにより、可能な限り学生の履修希望にかなった定員配分となるように調整を行っている。



学生への受講ガイダンス

共同化授業の取組について、受講する学生にわかりやすく周知を図るため、三大学共通のガイダンス冊子「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」を作成した。

冊子には、この1冊があればスムーズに共同化授業が受講できるよう、共同化の理念・目的をはじめ、共同化科目の履修方法、共同化科目一覧、前・後期ごとの各科目の履修定員、科目概要、開講時間割などを掲載した。科目概要には、科目の説明だけでなく、当該科目担当教員の授業に対する姿勢や思いを学生へのメッセージとして、授業目的区分とともに掲載した。また今年度から新たに、共同化科目の受講生向けのアンケートから得た意見などを元に作成した、共同化に関するFAQを掲載した。

また、三大学教養教育共同化単位互換制度について、より一層の活用が図られるよう、冊子にまとめた「単位互換科目履修ガイド」を昨年度同様に作成し、配布した。

学生への受講ガイダンスは、各大学で実施される新入生履修ガイダンス時に、共同化科目に関して説明する時間枠をそれぞれ設け、関連冊子の配布と説明を行った。

平成30年度 共同化科目一覧

科目群	科目名	担当教員	開講期	授業目的区分		
				A	B	C
人間と歴史	哲学	工・伊藤	後	○	○	
	比較宗教学	工・長岡	前	○	○	
	宗教と文化	医・田中	後	○	○	
	日本史	工・鬼頭	前	○	○	
	東西文化交流史	工・オガサタ	後	○	○	○
	アジアの歴史と文化	府・中	前	○	○	
	ヨーロッパの歴史と文化	府・岡部ほか	後	○	○	
	ラテン語	医・松本	後	○	○	
	西洋文化論	工・山下太	後	○	○	
	日本文学Ⅰ	医・早川	前	○	○	
文化・芸術	日本文学Ⅱ	医・早川	後	○	○	
	日本近現代文学	工・佐藤	前	○	○	
	西洋文学論	工・山下大	前	○	○	
	文芸創作論	医・藤田	後	○	○	
	美と芸術	工・三木順	前	○	○	
	日本近代精神史	工・伊藤	前	○	○	
	フランス語圏の文化とジャポニスム(※2回生以上)	工・吉川	前(前)	○	○	
	映画で学ぶ英語と文化(※3回生以上)	府・野口	後(前)	○	○	
	映画で学ぶドイツ語と文化(※3回生以上)	府・青地	前(前)	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
京都学	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	前	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
リベラルアーツ・ゼミナール	京都学・歴史館ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(前)	○	○	
	現代イスラム世界の文化と社会(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・田村	集中・夏	○	○	
	感性の実践哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・桑子	集中・夏	○	○	
社会科学の基礎	科学と思想(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧科学と思想)	工・林	後	○	○	
	京都学・歴史館ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)(再掲)	機構・藤本ほか	後(前)	○	○	
	人文地理学Ⅰ	医・古関	前	○	○	
	人文地理学Ⅱ	医・古関	後	○	○	
	社会学Ⅰ	府・井口	前	○	○	
	社会学Ⅱ	府・井口	後	○	○	
	政治学	府・竹本	後	○	○	
	国際政治	府・依田	前	○	○	
	経済学入門	工・人見	後	○	○	
	法学	工・北村	前	○	○	
人間と社会	生活と経済	府・小沢	前	○	○	
	心理学	工・大谷	後	○	○	
	発達心理学	医・小川	集中・夏	○	○	
	現代社会と心	府・石田	後	○	○	
	現代社会とジェンダー	府・中根ほか	前	○	○	
	現代教育論	工・塩屋	前	○	○	
	食環境をめぐる国際社会と日本	府・宗田ほか	前	○	○	
	環境と法	工・鳥合部	後	○	○	
	近代京都と三大学	機構・宗田ほか	前	○	○	
	京の産業技術史	工・山田	前	○	○	
京都学	現代京都論	府・大島	前	○	○	
	医史学	医・八木	後	○	○	
	京都の経済	府・川勝	後	○	○	
	現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・児玉	前	○	○	
	社会科学の学び方(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・児玉	後	○	○	
リベラルアーツ・ゼミナール	現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・長坂	集中・夏	○	○	
	世界はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧アメリカと中国はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ))	機構・脇田	集中・冬	○	○	
	経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ))	機構・児玉	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
人間と自然・科学	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
自然科学の基礎	物理学Ⅰ	府・春山	前	○	○	
	化学概論Ⅰ	工・三木定	前	○	○	
	化学概論Ⅱ	工・石川	後	○	○	
	生物学概論Ⅰ	工・正田	前	○	○	
	生物学概論Ⅱ	工・正田	後	○	○	
人間と自然・科学	生命科学講話	府・塚本ほか	集中・夏	○	○	
	地球の科学	工・酒井	後	○	○	

担当教員(それぞれの略称は、科目の提供大学・機関を示します。)

工：京都工芸繊維大学、府：京都府立大学、医：京都府立医科大学、

機構：京都三大学教養教育研究・推進機構

授業目的区分(○は該当するもの、◎は特に強調するもの)

A：人文・社会・自然の諸分野の学術体系を俯瞰しながらこれらの基礎を幅広く

学習し、学術への高い関心を育てる。

B：世界の人々の多様な生き方を感じ、人としての豊かな感性や倫理観を拡張

する。

C：日々社会に生起する種々の問題において、真理や正義を探究する議論に習熟

する。

科目群	科目名	担当教員	開講期	授業目的区分		
				A	B	C
人間と自然・科学	人と自然と数学α	工・峯	前	○	○	
	人と自然と数学β	工・朝田	後	○	○	
	人と自然と物理学	工・萩原ほか	後	○	○	
	生物学の人間学	医・小野ほか	前	○	○	
	科学史	工・大西	後	○	○	
	環境問題と持続可能な社会	工・山田	前	○	○	
	食と健康の科学	府・東ほか	前	○	○	
	キャンパスヘルス概論	工・荒井	前	○	○	
	新発見生物学特論(※3回生以上(修士課程大学院生を含む。))	医・八木田	集中・夏	○	○	
	エネルギー科学	工・林	前	○	○	
京都学	現代科学と倫理	府・岩崎	前	○	○	
	医学概論(※2回生以上の工・大生が対象)	医・奥田ほか	後(前)	○	○	
	環境論	機構・田中	後(前)	○	○	
	京都の自然と森林	府・高原ほか	前	○	○	
	京都の農林業	府・寺林ほか	後	○	○	
	京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナール)	府・間藤ほか	集中	○	○	
	京都の防災と府民	機構・播磨ほか	後	○	○	
	製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・石田	後	○	○	
	京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(再掲)	府・間藤ほか	集中	○	○	
	意外と知らない植物の世界(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧意外と知らない植物の世界)	機構・松谷ほか	後	○	○	
リベラルアーツ・ゼミナール	意外と知らない植物の世界(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧意外と知らない植物の世界)	機構・松谷ほか	後	○	○	
	レーザで見る、創る、楽しむ(リベラルアーツ・ゼミナール)	機構・播磨	前	○	○	
	京都学・歴史館ゼミ(リベラルアーツ・ゼミナール)(※2回生以上)	機構・藤本ほか	後(前)	○	○	
	科学と思想(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧科学と思想)	工・林	後	○	○	
	現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・児玉	前	○	○	
リベラルアーツ・ゼミナール(13科目)	社会科学の学び方(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・児玉	後	○	○	
	経営哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(※2回生以上)	機構・児玉	後	○	○	
	製品の機能から科学を学ぶ(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・石田	後	○	○	
	意外と知らない植物の世界(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧意外と知らない植物の世界)	機構・松谷ほか	後	○	○	
	レーザで見る、創る、楽しむ(リベラルアーツ・ゼミナール)	機構・播磨	前	○	○	
	現代イスラム世界の文化と社会(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・田村	集中・夏	○	○	
	感性の実践哲学(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・桑子	集中・夏	○	○	
	現代社会と映画製作(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	機構・長坂	集中・夏	○	○	
	世界はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)(旧アメリカと中国はいま(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ))	機構・脇田	集中・冬	○	○	
	京野菜を栽培する(リベラルアーツ・ゼミナールⅡ)	府・間藤ほか	集中	○	○	
集中開講	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
京都学(16科目)	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
(再掲)	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
2回生以上向け開講(8科目)	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	
	京の意匠	工・並木	後	○	○	
	英語で京都(※3回生以上)	府・山口	後	○	○	
	京都の歴史Ⅰ	府・菱田ほか	前	○	○	
	京都の歴史Ⅱ	府・小林ほか	後	○	○	
	京都の文学Ⅰ	府・安達	前	○	○	
	京都の文学Ⅱ	府・本井	後	○	○	

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成30年度前期）

提供大学	開講コース	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
工織大	月2	フランス語圏の文化とジャポニスム（※2回生以上）	8	3	0	11	27.3%
府大	月2	映画で学ぶドイツ語と文化（※3回生以上）	2	9	0	11	18.2%
工織大	月3	日本近代精神史	55	15	9	79	30.4%
工織大	月3	法学	32	22	10	64	50.0%
工織大	月3	現代教育論	127	17	29	173	26.6%
工織大	月3	京の産業技術史	53	16	8	77	31.2%
工織大	月3	生物学概論Ⅰ	29	55	18	102	71.6%
工織大	月3	環境問題と持続可能な社会	52	18	16	86	39.5%
府大	月3	京都の歴史Ⅰ	103	138	37	278	50.4%
府大	月3	社会学Ⅰ	33	72	14	119	39.5%
府大	月3	国際政治	7	22	12	41	46.3%
府大	月3	現代京都論	120	50	23	193	74.1%
府大	月3	物理学Ⅰ	72	21	10	103	79.6%
機構	月3	現代社会に学ぶ問う力・書く力a（リベラルアーツ・ゼミナール）	11	9	10	30	-
工織大	月4	日本史	61	43	11	115	47.0%
工織大	月4	美と芸術	152	43	6	201	24.4%
工織大	月4	化学概論Ⅰ	90	8	1	99	9.1%
工織大	月4	人と自然と数学a	110	6	3	119	7.6%
工織大	月4	キャンパスヘルス概論	44	119	32	195	77.4%
府大	月4	京都の文学Ⅰ	14	47	1	62	24.2%
府大	月4	食と健康の科学	93	62	18	173	64.2%
医大	月4	日本文学Ⅰ	18	22	1	41	97.6%
医大	月4	人文地理学Ⅰ	69	46	57	172	66.9%
医大	月4	生物学的人間学	20	22	46	88	47.7%
機構	月4	近代京都と三大学	16	30	0	46	-
機構	月4	レーザで測る、創る、楽しむ（リベラルアーツ・ゼミナール）	15	11	4	30	-
工織大	月5	比較宗教学	104	57	10	171	39.2%
工織大	月5	西洋文学論	13	22	0	35	62.9%
工織大	月5	心理学	127	24	12	163	22.1%
工織大	月5	エネルギー科学	76	11	0	87	12.6%
府大	月5	アジアの歴史と文化	46	41	2	89	53.9%
府大	月5	現代社会とジェンダー	50	61	7	118	48.3%
府大	月5	食環境をめぐる国際社会と日本	57	24	6	87	72.4%
府大	月5	京都の自然と森林	80	98	16	194	49.5%
府大	月5	現代科学と倫理	26	4	0	30	86.7%
機構	月5	現代社会に学ぶ問う力・書く力b（リベラルアーツ・ゼミナール）	16	5	8	29	-
府大	集中	生命科学講話	514	87	42	643	86.5%
医大	集中	発達心理学	73	10	89	172	48.3%
医大	集中	時間生物学特論（※3回生以上（修士課程大学院生を含む））	34	8	4	46	91.3%
機構	集中	現代社会と映画製作（リベラルアーツ・ゼミナール）	18	7	4	29	-
機構	集中	現代イスラム世界の文化と社会（リベラルアーツ・ゼミナール）	11	10	8	29	-
機構	集中	感性の実践哲学（リベラルアーツ・ゼミナール）	19	5	5	29	-
府大	集中	京野菜を栽培する（リベラルアーツ・ゼミナール）	16	10	4	30	66.7%
		合 計	2,686	1,410	593	4,689	53.5%

（注）交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成30年度後期）

提供大学	開講コース	科目名	履修者数				交流率
			工織大	府大	医大	合計	
医大	月1	医学概論（※2回生以上の工織大・府大生）	28	8	0	36	100.0%
府大	月2	映画で学ぶ英語と文化（※3回生以上）	12	16	0	28	42.9%
機構	月2	京都学・歴彩館ゼミ（リベラルアーツ・ゼミナール）（※2回生以上）	5	4	0	9	-
機構	月2	環境論	135	55	0	190	-
工織大	月3	哲学	68	42	5	115	40.9%
工織大	月3	東西文化交流史	108	26	2	136	20.6%
工織大	月3	京の意匠	30	9	1	40	25.0%
工織大	月3	政治学	12	11	0	23	47.8%
工織大	月3	科学史	49	7	1	57	14.0%
工織大	月3	生物学概論Ⅱ	23	51	3	77	70.1%
府大	月3	京都の歴史Ⅱ	45	81	6	132	38.6%
府大	月3	社会学Ⅱ	50	67	3	120	44.2%
府大	月3	京都の経済	159	87	3	249	65.1%
医大	月3	文芸創作論	10	23	4	37	89.2%
医大	月3	医史学	15	11	40	66	39.4%
機構	月3	社会科学の学び方（リベラルアーツ・ゼミナール）	18	10	0	28	-
機構	月3	製品の機能から科学を学ぶ（リベラルアーツ・ゼミナール）	13	7	0	20	-
機構	月3	意外と知らない植物の世界（リベラルアーツ・ゼミナール）	10	10	10	30	-
工織大	月4	科学と思想（リベラルアーツ・ゼミナール）	21	8	1	30	30.0%
工織大	月4	環境と法	70	45	0	115	39.1%
工織大	月4	人と自然と数学β	29	3	0	32	9.4%
工織大	月4	人と自然と物理学	13	6	1	20	35.0%
府大	月4	ヨーロッパの歴史と文化	75	88	10	173	49.1%
府大	月4	京都の文学Ⅱ	55	34	0	89	61.8%
府大	月4	現代社会と心	80	104	10	194	46.4%
医大	月4	宗教と文化	26	40	0	66	100.0%
医大	月4	ラテン語	94	41	5	140	96.4%
医大	月4	日本文学Ⅱ	12	16	0	28	100.0%
医大	月4	人文地理学Ⅱ	57	34	29	120	75.8%
機構	月4	京都の防災と府民	61	31	4	96	-
工織大	月5	西洋文化論	59	27	2	88	33.0%
工織大	月5	日本近現代文学	89	71	1	161	44.7%
工織大	月5	経済学入門	48	21	2	71	32.4%
工織大	月5	化学概論Ⅱ	23	3	1	27	14.8%
工織大	月5	地球の科学	105	60	5	170	38.2%
府大	月5	英語で京都（※3回生以上）	6	1	0	7	85.7%
府大	月5	生活と経済	31	38	1	70	45.7%
府大	月5	京都の農林業	91	104	0	195	46.7%
機構	月5	経営哲学（リベラルアーツ・ゼミナール）（※2回生以上）	5	5	0	10	-
機構	集中	世界はいま（リベラルアーツ・ゼミナール）	14	11	5	30	-
		合 計	1,854	1,316	155	3,325	50.4%

（注）交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

(1) 平成30年度のリベラルアーツ・センターの活動を総括して

京都三大学教養教育研究・推進機構 リベラルアーツセンター長／京都府立大学 教授
岡本 隆司

本年度は文科省事業後の独自運営になってから2年目にあたり、原則として、初年度の昨年度に達成した成果を継続維持してゆく方針で、宿泊研修や学生企画事業の実施など、以下に列举するような活動を行った。

- 1) 30年度のカリキュラム構成（科目）の考え方
- 2) 宿泊研修（概略のみ）
- 3) 山田洋次監督特別講義（概略のみ）

1) 30年度のカリキュラム構成（科目）の考え方

平成30年度は合計82の共同化科目を用意して、十分な種類と数の授業を提供できたと考えている。

全体のカリキュラムも、昨年度までの成果に準拠して、人文・社会・自然諸分野の学術を俯瞰し、その基礎を学習するとともに、世界の多様性を感じ、日常社会に生じる問題の真理を探究する議論ができるような学生を育成する考え方にもとづいて構成しており、当面は所期の目標にかなう現状である。

もとより学生のニーズ・社会の要請に応じて、科目の内容・構成に改編・洗練を加えていくことは、必要である。他方、担当人員・配当予算などの制約によって、休止・廃止を考慮せざるをえない科目もある、そのため、全体的なバランスにも考慮しつつ、カリキュラム構成を不断に検討していかねばならない。

2) 宿泊研修

今年度の詳細な内容は後述に譲ることとし、ここでは全体的な位置づけ・概要と今後の展望のみ、述べておきたい。

・研修の概要

この企画は三大学の学生が研修・宿泊をともにすることで、濃密な交流の機会を作るもので、一昨年度から実施してきた、いわば三大学教養教育共同化事業の目玉の一つである。

昨年度は9月に1泊2日の日程で、京都府南部・山城地域の和束町に出かけ、京都府の重要特産品の一つである「お茶」の生産地として有名な和束町の地域的な特徴と課題を実見、検討した。この宿泊研修が大きな成果をあげたことから、今年度も周回の準備を通じ、平成30年9月10日（月）・11日（火）の、やはり1泊2日の日程で実現をみた。

訪問先は京都府北部の京丹後市を選定した。美しい海岸などの豊かな自然、伝統ある絹織物「丹後ちりめん」をはじめとする特産品に恵まれ、農林水産・観光業がさかんな地域である。その一方で、過疎化や高齢化が急速に進行し、地場産業の振興や移住・定住の促進が地域的に重大な課題となっている。

背景・専門の異なる学生たちが交流しつつ、そうした地域の実情・課題に直接ふれるとともに、自らその解決を考える研修として企画したものである。

参加学生は10名、それぞれの研修先で、従来ほとんど見聞したことのない職種の人々と出会い、親しく交流し、そして地域の課題を自らの課題として真摯に検討、討論することを通じて、対人交流・情報収集・課題発見・資料整理・意見発表の

技量を高めていった。

学生たち自身も大きな手応えを感じたようで、口をそろえて充実感と達成感を語っていた。昨年度と同様に、学生たちに貴重な機会と経験を提供できたのは、大きな成果だったと総括することができる。

・今後の展望

宿泊研修はこのように、大きな成果を上げてきているものの、とりわけ今年度は、応募学生の集まりがかんばしくなく、実施も危ぶまれたこと、また例年、準備に大きな時間・労力のコストをとまなうことから、学生交流事業として、今後の継続性を考慮すると、従前の規模・方法をそのまま続けていくことに、種々の困難を感じざるをえなかった。

他方で、三学生の交流の必要性は、学生の側からのニーズも高いし、また教養教育の目的・効果の点からも減じない。そこでリベラルアーツ・センターでは、より多くの学生に参加してもらえるような、宿泊研修に代わる継続可能な交流会の企画を検討中であり、数回にわたるメール会議で、講演会・討論会とリベラルアーツ・ゼミナールなどの授業科目を組み合わせるような具体案を審議している。

本稿執筆の時点では、なお成案を得ていないけれども、新たな交流会の来年度の実施にむけて、鋭意努力していきたい。

の受講生が、授業で取り上げられた山田洋次監督の作品に感銘を受け、実際に山田監督をお招きしてお話をうかがいたいと考えて、実現したものである。

受講生が自主的に講演会の企画を立て、1年以上の時間をかけて、打ち合わせや映画上映会・勉強会などを重ねた上に、授業科目担当教員の長坂勉先生の多大なお力添えと、講演を応諾くださった山田監督のご厚意を得て、企画が実現することとなった。

この学生企画講演会は、平成30年6月27日、稲盛記念会館において、「山田洋次監督特別講義『映画をつくる』」として開催された。当日は、企画した学生たちから山田監督に質疑を行うトークセッションの形式ですすめられ、京都府立大学・京都工芸繊維大学・京都府立医科大学の三大学の学生・教職員はもとより、他大学の学生や一般府民の方々もふくめ、200名以上の参加者があり、たいへんな盛会になった。

京都三大学教養教育研究・推進機構でも、学生探求活動支援として、講演会の運営をサポートしたものであり、特に記しておきたい。

3) 山田洋次監督特別講義 (概略のみ)

詳細な経過と内容は、後述に譲ることとし、ここではその概要のみ、述べておきたい。

この企画は、共同化科目「現代社会と映画製作」

(2) 教育 IR センターからの総合報告 - 2018 年度 (平成 30 年度) -

京都三大学教養教育研究・推進機構 教育 IR センター長／京都工芸繊維大学 教授

萩原 亮

はじめに

本年度は、機構運営委員の体制の更新に応じて教育 IR センターの構成メンバーも改まり、京都府立大学の鈴木孝禎教授、京都府立医科大学の織田昌幸教授とともに、センターの運営を進めさせてもらった。文部科学省からの助成を受けた当初の形態が一段落した本年度以降も、当センターの活動が、定形に陥ることなく、それでいて無理なく安定的に継続していけるような流れを築くことが大切だと考え、工夫できそうなところを様々思案しつつ進めてきたが、明確な提案などを示す段階には至っていない。今回の報告は、そうした提案に結びつけるための前段階としての意味もあって、全情報を網羅的に整理する形にはなっていないことをご容赦願いたい。

前回にも言及したように、当 IR センターは、何かの決定権を有する機関ではないし、また、三大学それぞれの意思決定機関との関係のとり方も明確には定まっていない。しかし、だからこそ、予め着地点が定められた形式的書類づくりからも逃れられている。共同化科目の担当教員各位をはじめ、本稿の読者の方々には、是非、こうした性格を有する教育 IR センターの存在を日頃より意識していただき、三大学共同化教養教育の実践面に関する関連なご意見やご提案などをいただければ幸いである。

なお、以下の報告に先立ち、昨年度から継続する基本方針に触れておく。IR 活動の趣旨はあくまで総合的な調査・分析にあり、特定した授業科目の一つ一つに視点を向けることではない。それぞれの授業の完成度やそれによる教養教育の意義を向上させる原動力は、各担当教員の自発的な意思に基づく以外にないことは明らかである。

1. 履修登録者数の歴年推移

共同化授業科目の履修登録者数のデータは、機

構事務局のもとに集まり、毎年公表されている(今年度分は本報告書第1部に掲載)。先ず、共同化科目開始以来、全科目総合の履修登録者がどのように変遷してきたかを、各大学別のグラフとして描き、図1に掲載する。上下段に分かれた(a), (b)は、前期と後期の別である。2017年度までの緩やかで概ね単調な変化が、本年度には異例の動きを示した。前期の府立大履修者が顕著に低減し、その減少分を埋め合わせるように、前・後期両方の工織大履修者が増加している。府立大では、今年度より、履修単位の上限(CAP)制が導入されており、その影響が、特に前期の登録人数に強く現われたものと解される。対する工織大生の増加は、簡単には説明できないが、(希望者の多い科目で)府立大生の減少にともなって抽選倍率が下がったことが、工織大生の登録数を助長したとも解釈される。だとすれば、これまで、履修科目の希

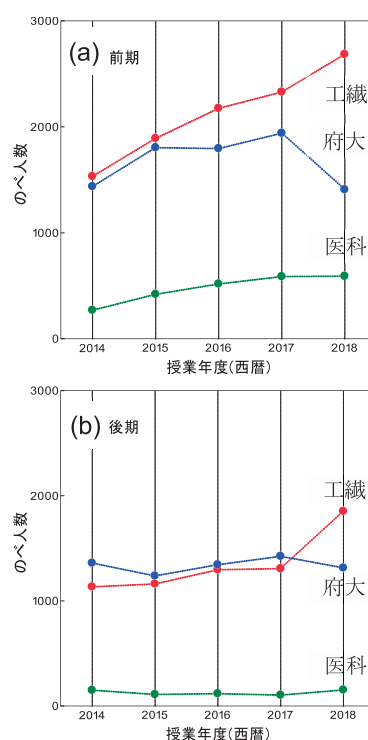


図1. 大学別履修者総数の歴年変化
(a):前期, (b):後期

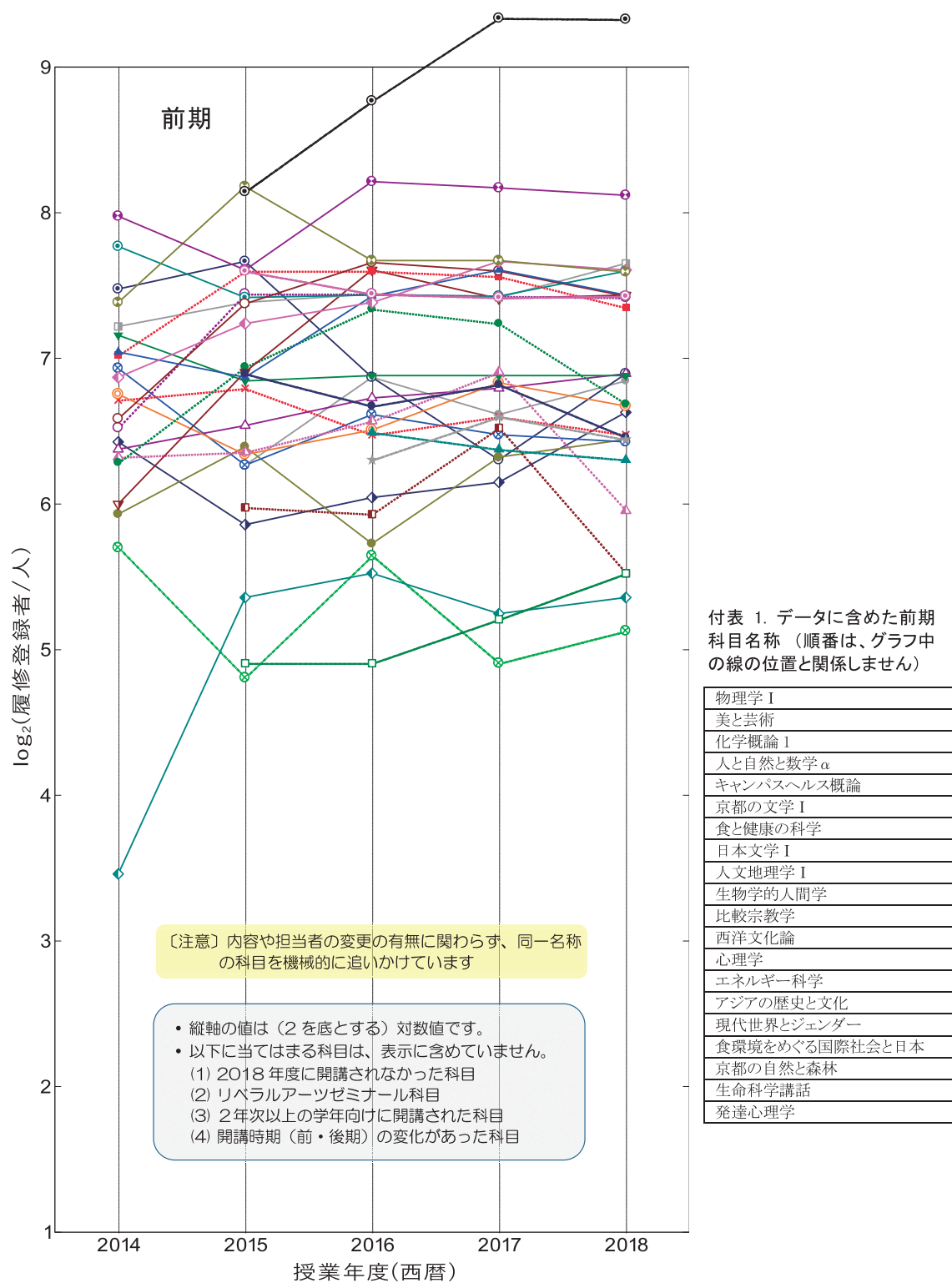


図 2 各科目履修登録者数の歴年変化 (前期開講分)

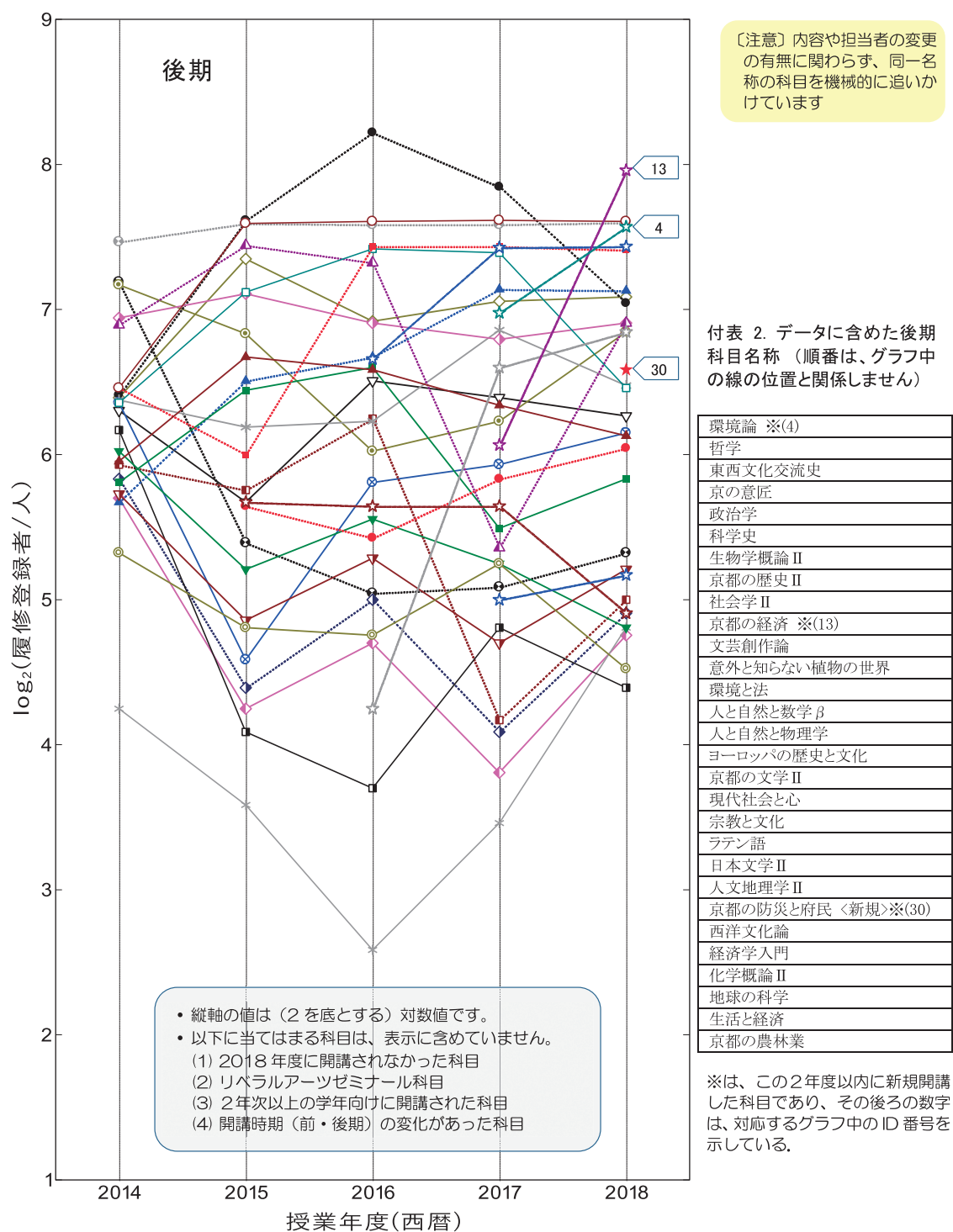


図3 各科目履修登録者数の歴年変化 (後期開講分)

望が通らなかったために登録を控えていた学生が少なからずいたことになるし、また別の見方をすれば、学生が、共同化教養科目を、必要に迫られる最小限にとどめず、幅広く、数多く受講しようとする志向性が確認されたとも言える。履修単位の上限は、この学生の志向に対する一定の足枷要因であることは否めないだろう。さらにまた、受講者人数の大学間のバランスに対して、無視できない影響が出たことにも注意を向ける必要がある。

各個別科目の履修登録者の変遷を、昨年報告したグラフと同様の形に整理して掲載する(図 2, 3)。縦軸量の人数は、2 底の対数で表示している(情報量のビット数表現と同様に見ていただきたい)。ただし、今回は、冊子がモノクロ印刷されるため、科目毎のラインが識別できないと思われるので、科目名の ID は、直近 2 年度以内に新規開設されたものだけを示した(科目名を表記した前回の報告と照合すれば、特定科目のラインの続きを知ることができる)。

さて、履修者動向の変化の全体的パターンを観ると、これまでの変遷の特徴がなお続いていることがわかる。特に前期の‘高止まり安定的’な傾向ははっきりしていて、2⁵ 人を下回る科目は無く、教室などの計画も立ちやすい形になっている。対して、後期の図 3 では、前回に述べた‘2015 年のインパクト’からの緩和的傾向が継続している。ただし、個々のラインは前期よりも複雑な変化を示し、各科目の履修人数が不安定・大幅に変動する傾向がある。総括的に窺えることは、学生が、できるだけ前期に必要な履修を済ませ、後期科目をオプション風に扱おうとする意識傾向である。一方、講義を提供する側の観点では、人数の過剰は解消されるべきだし、後期科目の人数の変動も軽減することが望ましい。昨年度にも言及したが、前後期別の開講科目数のバランスを、もう少し前期側に寄せる方がよいだろうし、また、各授業内容や対象学生の想定範囲に基づく一定の議

論や相談をとおして、科目の時間割配置を立案していく方式を検討すべきと考える。

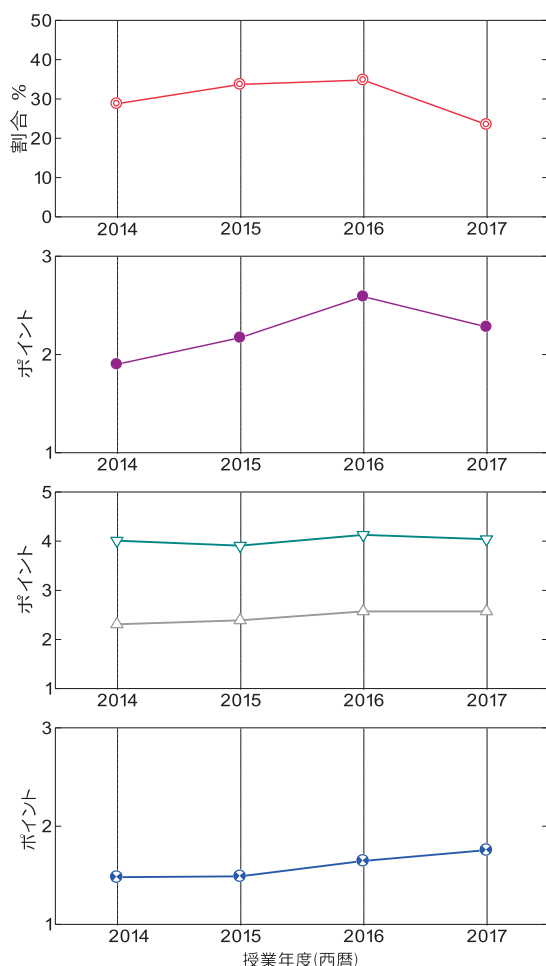


2. 1 年次生アンケート

共同化科目を実際に受講した 1 年次生を対象に、各年度の後期の最終段階で、Web フォーム入力形式のアンケートを実施している。個々の学生が履修科目を選ぶ際の意識のもち方や不満要因などを探ることができ、また、求められる科目カテゴリーをキャッチして、今後の科目構成の設計に活かすなど、個別の授業アンケートとは別側面の役割を担っている。

ここでは、現時点で得られている 2017 年度までの回答を歴年的に整理し、ポイントに換算して考察できるいくつかの項目について、年次推移のグラフとして図 4 に示す。まず、(回答内容ではなく)回答した学生数を表す図 4 (a) に目を向けてほしい。回答率は、前年度まで 30% 台に落ち着く気配であったが、2017 年度に至って、20% 台前半にまで急低下している。科目構成に関わる重要な情報源とするからには、母集団の 1/4 以下の標本となっている状態は改善されねばならない。限られたインタビューを通してではあるが、同様のことを何度も答えるのが面倒である一方で、手間に見合うメリットが感じられない旨の学生の声も聞いている。今年度をもって、一貫した設問による 5 年間の追跡が成されたことになるので、ここを一区切りとして、次年度には、質問の構成と答えの選択肢の形式をシンプルに変えたアンケートの新バージョンを立案する方向を視野に入りたい。

(b) は、抽選制度に対する学生の反応である。前回、現状が十分是認されている旨のコメントを付けたが、楽観を制するかのごとく、肯定ポイントが低下した。希望科目の履修が叶わなかった不満は、自由記述にもしばしば表れるが、希望の集



(a)

回答率(%). 在籍1年次生の総数を母数とした、回答 Web 入力があった者の割合(%).

(b)

問 2. 履修登録時の抽選についてどう思うか?

現状でよい ⇒1 3

どちらとも言えない ⇒2

できればなくしてほしい ⇒1

(c)

問 5. 履修した科目の満足度の最高値と最低値を5段階の自然数値で表すといくらか?

[5, 4, 3, 2, 1]

▽:最高値, △:最低値

(d)

問 8. 他大学の学生との交流の機会(学期ごとの回数)?

7 回程度以上 ⇒4

3~6 回程度 ⇒3

1~2 回程度 ⇒2

なかった ⇒1

図 4 1 年次生アンケート結果(ポイント化し得るいくつかの事項)の年次推移. (内容は各右側に記載)

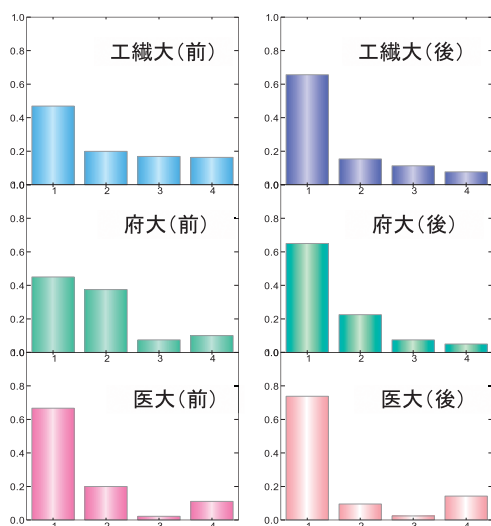


図5 2017年度、問8の所属大学別の回答分布. 縦軸量は、所属大学内の回答数の割合であり、ポイントの区分1~4の定義は図3(d)と同じである. 左右の枠は全・後期別、上下3段の欄は大学ごとの区別を表す.

中と、単位取得の容易さを関係づける意見が見られた。この問題は、軽々には扱えないが、今後の IR 的調査の一環にはなり得ることと考えている。

(c) は、科目の満足度であり、最高値 4 程度の高い値が安定的に維持されている。

(d) は、他大学の学生との交流機会を、回数として問うた結果である。前回の報告でグラフの縦軸数値が誤っていたので、その修正版としても見ていただきたい。平均値が徐々に上昇し続けていることは確かであるが、2017 年度分について所属大学別のデータを示すと図 5 のようになる。①後期よりも前期科目の方が平均ポイントが高い、②工繊大生が感じる程には府大、医大生の交流実感がない、これら二つの傾向が見られる。前後期の違いは、開講科目の構成が関わることで、ここでは立ち入らない。②の根本には大学間の人数のアンバランスがあると考えられる。多数の中の少数の側は、他大学生との共存を「交流」とは違った感覚で受けて止めている可能性を考慮すべきであろう。我々が取り組む「共同化」は、様々な側面で等価対称的ではないということを、意外なところから再認識させられる次第である。

3. 共同化科目担当者会議 および教員アンケート

各年度の注目される共同化科目担当者の方数名に授業内容や学生の反応等に関する報告をしていただき、実践上の工夫や問題などの情報を共有するための「共同化科目担当者会議」を毎年開催している。本年度は、11 月 12 日に、小野勝彦先生（京都府立医科大学）、北村幸也先生（京都工芸繊維大学）、野口祐子先生（京都府立大学）以上 3 名の方にお話しいただいた。本報告書第 3 部には、これら先生方の寄稿が掲載されているので、是非ご覧いただきたい。本年度会議当日の参加者は 32 名であった。今後、一層多くの方の参

加が得られれば幸いである。

また、年度末には、共同化科目ご担当者全員を対象として、電子メールによる、文章記述形式の「教員アンケート」を実施している。共同化科目の立案や運営等に関するご意見、ご提案、ご要望などを忌憚なくお伝えいただきたい。1 年遅れにはなるが、ご意見に対しては、当機構（リベラルアーツセンター、教育 IR センター、事務サイド）からの回答を提示させていただいている。



4. 授業評価アンケート

各大学独自の授業アンケートとは独立に、共同化科目用のアンケートを前期・後期それぞれの最終段階に実施している。印刷物ベースの無記名アンケートであり、結果は、機構事務のもとで（委託業者も使い）集計・チャート化した上で、各大学の教務事務経由で、個別に、各担当教員宛に送られる。各担当者において、授業内容の一層の工夫・進展の参考にしていただきたい。



むすびのひとこと

元来、'Liberal Arts'（自由学芸）の「自由」は、階層的力の上下関係のもとで強いられる労働から解放放たれる意を有している。ところが、今日の社会の中、我々は、所与の目的を達成するための組織論、あるいは、それに資する個人のスキルばかりに意識を向けさせられることが多い。自由学芸の意義は軽んじられがちである。しかし、思考の視野が狭くなると、人は、（一時のパフォーマンス向上は果たしても）最後に大きな過ちに向かって突き進むことは、歴史が証明している。それに対峙するのは、広いところを見とおす叡智、すなわち自由学芸の精神である。ここに明確に『時代が求める教養』の真の意義が見えてくる…私なりの拙な教養の意味付けである。

(3) 京都三大学学生企画講演会 「山田洋次監督特別講義『映画をつくる』」報告

日時

平成30年6月27日(水) 14:40～16:05

会場

教養教育共同化施設「稲盛記念会館」

1階104講義室(京都府立大学内)

テーマ

京都三大学学生企画講演会

山田洋次監督特別講義

「映画をつくる」

登壇者

○映画監督 山田洋次氏

○共同化科目非常勤講師 長坂勉氏

○企画学生3名

来場者

三大学等の学生、教職員、一般参加者 計215名



開催の目的・経緯

本企画は、共同化科目「現代社会と映画製作」の受講生が、授業で取り上げられた山田監督の作品に感銘を受け、実際に山田監督をお招きして講演会を開きたいと考えたところから始まった。

混迷の時代を私たちはいかにして生き抜けばよいのかということを問いかけるとともに、一般市民や家族の視点から社会を問い続けてこられた山田監督のお考えを伺い、参加者と共有し、日々を生きる上での指針を探りたいというのが趣旨であった。

企画学生は、半年以上前から何度も打ち合わせや映画上映会、感想交流会などを重ね、企画を練り上げ、チラシの作成・配付などの広報にも努めてきた。平成29年10月には企画学生が東上して直接山田監督と面談の上、講演会での登壇を依頼し、企画学生の熱意と、授業担当教員の長坂勉

先生の多大なご支援、そして山田洋次監督のご厚意の元、企画が実現することとなった。

なお、本企画は京都府公立大学法人学生地域活動支援事業の採択を受け、事業の実施には法人からの支援金を活用した。



講演会の概要

講演会の冒頭において、企画学生の杉山東洋氏による開会の宣言と本講演会開催の経緯及び趣旨等の説明があり、続いて京都府立大学の築山崇学長より開会の挨拶が述べられた。

特別講義は、企画学生から山田監督に、映画の感想交流会を通じて得られた質問を行い、山田監督にお答えいただくトークセッション方式で進められ、司会も企画学生の井上ゆら氏が務めた。

企画学生の池田野々花氏からはまず、映画作品の題材の入手方法や、スクリーンから伝わる鋭い問題意識を磨



くための方法について質問が出された。山田監督からは、1970年公開の『家族』という作品が、当時、ある駅で偶然出会った家族の様子をヒントに作られたことや、『男はつらいよ』製作のきっかけについて、「寅さん」というキャラクターは、俳優の渥美清さんと面談した際に、渥美さんが落語家のように面白く、少年時代にテキ屋に憧れた話やテキ屋の口上の真似を披露してくれたことから思いつかれたもので、「渥美清さんの中から掘り当てた」と話された。

次に、企画学生の安江範泰氏から、山田監督が自身の作品に込めるテーマ・メッセージについての質問がなされた。安江氏が、「人と人とのつな



がり」が山田作品の一貫したテーマとなっているのではないかと投げかけると、監督は「あらゆる小説、

演劇、映画が人と人とのつながりを描いている」とされ、映画ではその上でどんなドラマが描けるかが問われるのだと話された。特別支援学校が舞台となった『学校Ⅱ』（1996年）を例に、どんなドラマを設定すればそれを軸にしてストーリーが展開できるかを考える事が、監督の映画づくりの一番の基礎にあると述べられた。

作品で描く「笑い」へのこだわりを尋ねられると、山田監督は「寅さんは教養もお金も地位もないが、周囲を笑いで勇気づけている。苦しく辛い思いをしている人を励ますのは、激励でも叱責でもなく笑いだ」と話された。その背景としてご自身が戦後中国から引き揚げた後、食べ物も仕事も

お金もなく、中学校の学費を稼ぐためにやむを得ず闇市の仕事を始めた時のエピソードを披露され、そこで出会った先輩の同業者がとても面白い人で、いつも冗談を言って笑わせてくれたお陰で、辛い時も気持ちが明るくなり乗り切れたことや、「笑い」というのは「みんな同じ人間だ」という「共感」から生まれることも話された。



最後に戦争をテーマにした作品について質問が出された。山田監督は、戦時中に言論の自由がなかった経験から、『小さいうち』（2014年）では、そんな時代にも人間らしく美しく暮らしたい、人間とはそういうものだということを描きたかったと話された。また、個人の表現・思想についての自由が大切であると同時に、他人の意見に耳を傾けられるということが重要であり、相手の言い分を聞き、議論をして、例え少数意見でも相手の意見が正しいと思えば自分の意見を変えていくことが民主主義であると話された。

講義の最後に監督から大学生へのメッセージとして、「寅さん流に言えば、恋をなささいということ。大学の4年間は、肉体的にも精神的にも人間の土台が作られるときであり、恋をして悩み、たくさん本を読んで映画を観て物事の原理や基本について考えて欲しい。その中から、世界がどうあらねばならないか、自分はどうやって生きていけばいいのかを学んで欲しい。より良く生きるってことは何だろう、自分という人間はどういう人



第2部 時代が求める新たな教養教育像の探求

(3) 京都三大学学生企画講演会「山田洋次監督特別講義『映画をつくる』」報告

間なんだろうと悩んだり考えたり、そのことについて先生に意見を聞いたりするのが大学だと思う。」と語られた。

講義の後、京都府立大学副学長の石田昭人教授から全体の講評があり、安江氏の閉会の言葉で講演会は幕を閉じた。



開催の成果

本講演会においては、三大学の学生たちが協力して企画・運営を行うことで、三大学の学生間の交流が進むとともに、参加した学生は山田監督が語りかける言葉に真剣に聞き入る様子が見られるなど、学生主体の探求活動として充実した講義となった。また、学生のみならず、幅広い年代の地域住民も多数参加し、三大学の学生に対して本企画に対する感謝の声も多く聞かれるなど、地域社会に対して一定の貢献が出来た。

本講義の開催にあたり御協力くださった、山田洋次監督をはじめとする関係者の皆様に改めて感



謝申し上げる。

企画学生

京都府立大学：池田野々花・井上ゆら・杉山東洋・安江範泰、京都工芸繊維大学：秋岡恵美・藤原駿作・松浦隼人、京都府立医科大学：天野将明・森田輝

京都三大学学生企画講演会
山田洋次監督特別講義『映画をつくる』
プログラム

1.	開会あいさつ	(14:40-14:50)
2.	特別講義	(14:50-15:45)
3.	質疑応答	(15:45-15:55)
4.	山田洋次監督からのメッセージ	(15:55-16:00)
5.	閉会あいさつ	(16:00-16:05)

<講義の趣旨>
現在の日本で、少子高齢化は医療や家族の在り方に大きな変化をもたらしています。世界各地では、ポピュリズム政党の台頭による先行きの見えない政治が進行しています。親世代の時代を私たちはいらなくなって生き抜けばよいのでしょうか。

山田洋次監督は、平素記録を達成した長寿映画『男はつらいよ』(1969-1995)や、二宮和也主演作『母と暮せば』(2015)などの映画で、一般市民や家族の視点から社会を問いかけてこられました。長年日本映画界の第一線で活躍してこられた山田監督のお考えを伺い、それを皆さんと共有し、これから日々を生きていく上での指針を探りたいと思います。

<講師のご紹介>
山田洋次・1931年生まれ、大阪府出身。54年、東京大学法学部卒。69年『男はつらいよ』シリーズ開始。第1回日本アカデミー賞最優秀監督賞他6部門受賞の『幸福の黄色いハンカチ』(77)、『息子』(91)、『学校』(93)などの名作がある。92年、藤沢周平原作の本格時代劇『たそがれ清兵衛』では、第26回日本アカデミー賞15部門をはじめ日本の映画賞を数々のに。第75回米国アカデミー賞外国語映画部門ノミネートを受けた。最新作『華太善義のように』(家族はつらいよ編)は88年目の監督作となる。

京都三大学教養教育研究・推進機構 公認企画

京都三大学学生企画講演会
山田洋次監督特別講義
映画をつくる

「現在の日本で、少子高齢化は医療や家族の在り方に大きな変化をもたらしています。世界各地では、ポピュリズム政党の台頭による先行きの見えない政治が進行しています。親世代の時代を私たちはいらなくなって生き抜けばよいのでしょうか。」

山田洋次監督は、平素記録を達成した長寿映画『男はつらいよ』(1969-1995)や、二宮和也主演作『母と暮せば』(2015)などの映画で、一般市民や家族の視点から社会を問いかけてこられました。長年日本映画界の第一線で活躍してこられた山田監督のお考えを伺い、それを皆さんと共有し、これから日々を生きていく上での指針を探りたいと思います。

日時 2018年6月27日 水
14:40開演、16:05終了
(山田監督と企画学生によるトークセッション含む)

場所 稲盛記念会館
京都府京都市中京区「東山」(東山公園内約40分
徒歩約15分「西大路駅」より徒歩5分)

入場 無料 定員 200名
二大平毎が学生150人/一般90人
6-11歳までは6月1日から受付いたします。定員になり次第、受付を終了させていただきますのであらかじめご了承ください。

申込 csc@kpu.ac.jp
メールの受付先「山田洋次 特別講義 参加申し込み」
とし、本会にて登録の氏名・氏名を記入して、山田洋次アカデミーに送信してください。また、お問い合わせも山田洋次アカデミーから受け付けます。なお、参加費無料など随時イベントの開催を予定していますので山田洋次アカデミーのホームページを定期的にチェックしてください。

QRコード
Twitter Facebook

主催 京都府立大学・京都工芸繊維大学・京都府立医科大学
後援 京都府立大学・京都府立医科大学・京都府立医科大学・京都府立医科大学・京都府立医科大学・京都府立医科大学

(4) 平成30年度 京都三大学教養教育共同化事業 宿泊研修報告

京都三大学教養教育研究・推進機構 特任教授
播磨 弘



(1) 研修の概要

京都三大学教養教育研究・推進機構（以下、機構と略記）では、三大学（京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学）の学生が府内に赴き、地域課題を体感することを通じて、今後の学生生活や研究に役立てるとともに、学生間の交流を深めることを目的に平成28年度から宿泊研修を実施しており、本年度は京丹後市で実施した。

京丹後市は、平成16年4月に中郡峰山町・大宮町、竹野郡網野町・丹後町・弥栄町、熊野郡久美浜町の6つの町が合併して発足し、豊かな自然と文化的資産を有する地であるが、一方で急速な人口減少と高齢化が進行する地域でもある。

この研修の主なねらいは、まず三大学の学生間の親睦を深めること、次いで訪問地域の自然や文化に触れること、さらに地域住民や行政担当者との密度濃い交流を通じて地域の特性や課題について生の声を聴くことがあげられる。学生は研修の中で必要な情報を引き出す対話手法や情報を効率的に取りまとめる技法について、具体的なトレーニングを受けることになる。また最後に演習課題として、地域の発展につながるような新しいアイデアを地域の方々の前で学生が提案発表する企画が用意されている。

以下に平成30年9月10、11日に1泊2日の行程で実施した宿泊研修の結果を報告する。

今回の研修計画の立案は石田昭人教授（京都府立大学副学長、機構運営委員長）やコーディネーターの谷津孝啓氏（ボノ株式会社）、機構事務局が行ったものであるが、現地での訪問先との調整や意見交換等に関して、坂田真慶氏（一般社団法人Tsuchica）と石井真澄氏（京丹後市市長公室政策企画課）に多大なるご協力をいただいた。



(2) 研修の行程

研修に応募した学生は10名で、内訳は京都府立大学5名、京都工芸繊維大学3名、京都府立医科大学2名である。学年別では1年生3名、2年生4名、3年生3名であり、男女別には同数の5名ずつで、この内4名は昨年度も本研修に参加している。

また、コーディネーターとしてボノ（株）から谷津氏と高見堂亜美氏の2名、引率者として岡本隆司教授（京都府立大学文学部、機構リベラルアーツセンター長）、播磨弘教授（機構特任教授）、河野勉氏（機構事務局）の3名による総数15名で実施した。

初日の9月10日（月）の行程は以下の通りである。

9時に京都府立大をバスで出発し、「道の駅京丹波味夢の里（船井郡京丹波町）」での休憩を経て、12時に「浅茂川温泉 静の里（京丹後市網野町）」での昼食後、13時に「京丹後市移住支援センター、シェアオフィス（京丹後市網野町）」に到着した。

はじめに、市外からの移住促進、いわゆるUターン・Iターン者を呼び込むことを目的に平成30年5月に設置された「京丹後市移住支援センター」について、坂田真慶氏から説明を受けた。同氏は市から業務委託を受けた一般社団法人Tsuchicaの理事として、移住相談や現地案内、各種の情報発信を行っている。その後、学生



は京丹後市に移住し起業した方々から仕事内容を伺ったり、個別に質疑応答を行い活発に情報収集を行った。



これらの方々の仕事は海外からの観光客などの来訪者のサポートや、丹後の食環境を地産地消に活かす取組のほか、都会地のオフィスとインターネットでつないだテレワークによる映像作成など多岐に及ぶが、どの方も非常に个性的であり、それぞれの仕事への思いを情熱的に語る姿勢は共通している。その地域への愛着や仕事への情熱に感銘を受けた学生も多く、更なる情報を求めて個別の連絡先を尋ねる熱心な学生もいた。



15時20分に「五十河茅葺き（いかがかやぶき）桃源郷（京丹後市大宮町）」に到着。

ここでは江戸時代以来の古民家（築300年のこと）に居住する秋田県出身の若い移住者であ

る中川圭氏が農業を営みながら、京丹後市の「地域おこし協力隊」の隊員として地域おこし活動や関連情報の発信に精力的に取り組んでいる。学生は目の前でゆったりと草を食む牛や馬の姿にまず驚かされ、イメージの中にしか存在しなかった懐かしい日本の風景の中にタイムスリップしたような不思議な感覚を味わったのではなかろうか。



学生は薪割りや収穫した農産物の作業（豆の鞘むき）、さらに薪でご飯をかまど炊きするなどの体験をした。中川氏は、最後に設けられた学生との懇談の場で、いかに自分がやりたいことに挑戦し、自分なりの生き方を選ぶのかなどについて、自らのこれまでの経験をもとに学生へ静かに語りかけた。約1時間半の滞在時間であったが、終始穏やかにどの人にも接する中川氏の真摯な姿勢は非常に印象的であり、学生も中川氏の常識にとらわれず自分のやりたいことを実現する人生観に大いに刺激を受けていた。

17時15分から小野小町温泉（京丹後市大宮町）で入浴を済ませ、18時30分から丹後王国「食のみやこ」（京丹後市弥栄町）で夕食（郷土料理「丹後ばらすし」を使った幕の内弁当）の後、19時



30分に宿泊先の京都工芸繊維大学京丹後キャンパス地域連携センターに到着した。ここで石井眞澄氏をはじめとする京丹後市政策企画課の職員4名の方に参加いただき、19時50分よりワークショップ「京都三大学教養教育共同化事業 意見交換会 in 京丹後市」が始まった。まず石井氏から市の課題や主な施策の説明があり、その後、市職員と学生の間で3つのテーブルに分かれて質疑応答と意見交換が行われた。



国立社会保障・人口問題研究所の推計では、京丹後市の将来人口は約55,000人（2015年）から約32,000人（2045年）に減少し、高齢化率は35%（2015年）から50%（2045年）に上昇が予想され、こうした諸課題への対処のため、市では「地域づくり、ひとづくり、ものづくり、魅力づくり、基盤づくり」の重点5項目を進めており、例えば京丹後市移住支援センターの設置

は、「ひとづくり」の移住・定住支援事業の1つである。

約1時間半にわたる市職員と学生の意見交換が終了後、21時15分から学生によるグループ討論が始まった。まずコーディネーターの谷津氏のリードで、学生に京丹後市の「課題、可能性、人、活動、自然」の5つの観点から分類して、収穫した情報を付箋にメモ書きさせた。その上で、学生10名を2人ずつ5班に分け、テーマ「若者が京丹後市でチャレンジしたくなるアイデアを考えよう」のもとにユニークなアイデアを翌朝の発表会までに模造紙1枚にまとめるというものである。時間無制限で頑張れとの谷津氏の言葉にファイトをかき立てられた学生の中には深夜2～3時まで作業した班もあった。



第2日目、9月11日（火）の行程は以下の通りである。

8時頃に起床後、各自で朝食を済ませ、9時に谷津氏からプレゼンテーションの意味とやり方の説明があり、学生は発表に向けての直前の取りまとめ作業を各班で行った。

10時10分から、坂田氏と石井氏をはじめとする京丹後市政策企画課職員2名に前日の意見交換に引き続き参加いただき、テーマ「若者が京



丹後市でチャレンジしたくなるアイデアを考えよう」のもとに学生による提案発表会が始まった。発表5分、質疑応答5分で、各班の発表に対して坂田氏、市職員などから質問や意見が出された。



各班の提案内容はおよそ次のようなものであった。

- ・「地域との和プロジェクト」…仲介人（なこうど）が、教師や看護師のような専門職を目指す学生を京丹後市に呼ぶツアーを企画し、将来の定住を促す。
- ・「丹後繚乱コンテスト」…若者が「丹後ちりめん」をより身近に感じよう、芸舞妓をモデルに着付けの早さを競う、面白い着物のコンテストを企画する。
- ・「京丹後の森林未来図」…学生ボランティアによる林道整備事業をモデル化し、観光開発やインフラ整備などでの起業や将来の災害防止に役立てる。
- ・「京丹後市を第2の故郷に！」…被災者向けに空き家の紹介や職場・憩いの場の提供を行い、



空き家活用や人材確保、できれば定住化にも貢献する。

- ・「企業提携 KYOTAN GO !」…Iターン者増加のために、学生と行政、企業が連携して、学生向け研修型ツアーを企画し、京丹後の地域創生につなげる。



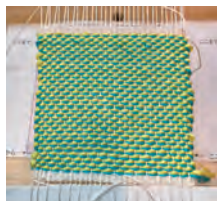
11時15分に発表会は終了し、その後にフィッシュボウル（金魚鉢）形式で学生間の討論が行われた。中心に4つのイスを円形に並べ1席は空席のまま置き、3人が座って対話を始め、残りの者は周りで待機する。待機者が対話に参加する場合は空席に座り、それに合わせて内側の席から



1人が外に出る形式で、発言機会が特定の参加者に片寄らない工夫がある。谷津氏が提示した討論テーマは2つあり、第1に「宿泊研修に参加したことによる一番の学びは何か?」、第2に「この仲間のできる事は?」であった。

12時25分から昼食（ギョーザ ベーカリーレストラン、京丹後市峰山町）の後、14時に「丹後ちりめん歴史館」（与謝野町岩屋）に到着し、丹後ちりめんの歴史や生産方法について説明を受けたあと、機織り体験（シルクのコースターづくり）を行った。

15時20分に出発し、「道の駅 京丹波味夢の里（船井郡京丹波町）」での休憩を経て、18時10分に京都府立大学に帰着した。



くお礼を申し上げたい。最後に、ぶっつけ本番の現場で見せてくれた学生たちの真剣な奮闘ぶりにも敬意を表したい。

(3) 研修を終えて

解散する前に、谷津氏が学生に研修に参加した印象を尋ねたところ、学生からは「他の学生や地域の人々の様々な考え方に触れ、良い経験になった、成長できたと感じる、この経験は自分の将来に生きる気がする」などの充実感や達成感を伝える多くの感想があった。学生が京丹後市の様々な人々や他の大学の学生と交流や議論を深める中で、自らとは異なる生き方や考え方を学び、今後の人生の糧を得る貴重な機会となったものであり、現地で丁寧に応対いただいた多くの方々に改めて厚

(1) 三大学教養教育共同化へのこれまでの関わり

(科目名：生物学的人間学 ほか)

京都府立医科大学 教授

小野 勝彦

三大学教養教育共同化は、2008年に私が京都府立医科大学（以下医大）に着任したときにはすでに決まっていた。平成17年の「中間まとめ」を踏まえた「基本方針」の合意事項に基づいて、どのような形態で共同化授業を行うのが模索されていた。

この10年間で、教養教育共同化への関わりを、講義への対応を含めて紹介したい。



1. 担当科目

(1) 生命科学講話

最初に始まった共同化授業である。上記の通り私が着任した当時から、つまり共同化施設ができる以前から、何らかの共同授業を行うようにという「上」からの強い要請があった。そこで、当時の花井教養教育部長や赤路教授（現京都薬科大学副学長）の発案で、京都府立大学（以下府大）で行われていたリレー講義「生命科学講話」に相乗りさせてもらうことを提案した。この講義をとりまとめられている塚本教授に了解をいただいて2009年から夏季集中講義として始まったものである。動物学、植物学、生物学、創薬学、神経科学、数学、物理学などを専門とする15人の教員が、トピック的な話題をわかりやすく解説する講義である。平成30年度は、医大からは7人、そのうち生物学教室からは2名が担当した。当初は、府大の300人収容の講義室で行われていたが、受講人数が増えてこの2年は工繊大の大ホールで行われている。

(2) 学際的科目

2013年4月に医大医学科教養教育部長を拝命しリベラルアーツセンター（LAC）教員を兼任、翌2014年にはLAC長となった。同年夏に、稲

盛記念会館が竣工し、医大の教養は花園キャンパスから現在の下鴨キャンパスに移転した。医大教養の教員にとっては、「花園機能の移転」ということで重要である。この年の後期から、本格的に共同化授業が始まった。

LAC長には、小沢修司機構長（当時府大副学長）の下で、学際的科目を考案し立ち上げることが課題の一つであった。共同化授業のひとつである「現代社会とジェンダー」は小沢先生が取りまとめをされており、府大の公共政策学部と文学部の先生が担当されていた科目であった。これに生命科学系の教員が入れば学際的科目となるのではないかと思います。提案させていただいた。小沢先生のご理解を得て、性分化やジェンダー形成を神経科学・生物学の視点で解説する教員を1名入れさせていただくことになった。当初は医大の基礎医学の教員に依頼することを目論んでいたが、カリキュラムの改定で時間が合わず、私が担当することとなった。省エネ的に課題を一つこなすことができた。小沢先生は、退職後もこの科目に関わりつつ次のコーディネーターにバトンを渡されている。

一方、ゼロから立ち上がった学際的科目もある。「意外と知らない植物の世界」である。これは、LAC特任准教授の藤井陽奈子先生と府立植物園の松谷名誉園長が取りまとめ教員となり始まった科目である。文学、社会学、農学、生物学の教員が担当し、府立植物園での講義や演習も行われており、医大生物教室からも1名が参画している。

(3) 生物学的人間学

私どもの医大生物教室から提供している科目である。私は医大医学科の教員であるが、この科目は医大看護学科の提供科目である。医大の棚次教授（宗教学）が共同化科目として「人間学」を担当されていたが先生の退職を機に、看護学科で行

っていた生物学を「生物学的人間学」として他の「生物学」とは差別化し、共同化科目として提供することとなった。15回の講義の前半は細胞機能の視点から、後半は臓器の形や機能の視点からヒトについて解説している。最初は、看護学科の学生が7割くらいを占めていたが現在では半分くらいになり、逆に他大学の受講生が増えてきた。一方、理科系学部・学科の学生ばかりであり、人文・社会科学系の学部の学生にも受講してもらいたいと思っている。



2. 共同化授業の進め方

(1) 普通に耳にする内容をとっかかりに

講義の内容は、学生が興味を持てるような内容ということ意識している。「生命科学講話」では「脳の話」というタイトルで、1. 脳の「しわ」が多いと賢いのか?、2. 脳は1/10しか使われていない?、3. 右脳を鍛えるといいの?、という誰もが一度は聞いたことのある話題から、脳を解説している。「生物学的人間学」では、細胞の機能の解説で、老化・幹細胞・がんなど身近な話題から入り、臓器の解説でも、五感と痛みと脳機能、生殖器など、これも日常を少し意識すると誰でも感じることを題材として紹介している。「現代社会とジェンダー」には、その内容から少しシリアスに向き合っている。政治家と言われる人がマイノリティーに対して否定的な発言をする際に、生物を例えることがあるが、そういう発言内容が生物学の立場からどのように間違っているかということを解説することは忘れないようにしている。生物学的な性の決定機構や、脳の性差形成を中心に解説している。

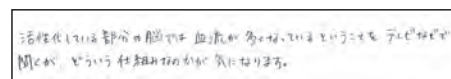
(2) 講義資料など

いずれの科目も、基本的には講義スタイルである。特定の教科書は使わず、講義プリントを作成・配布している。また、プリントより少し詳しいスライドを、生物学教室のHPにアップしてアクセスしてもらっている。講義内容に対する質問や講義に対するコメントには、講義中に回答したいが十分な時間がとれないことから、これもHPを通して回答している。

今年度から新しい試みとして、学生同士で話をする機会を3回持った。1) 教養とはどのようなものと考えているか、2) 老化についてどのようなイメージを持っているか、3) 脳についてどのようなイメージを持っているか・どのようなことを知りたいか、というテーマでグループ討論した。学生は話し合った内容を発表し、あわせてグループメモを提出した。このメモはスキャンして私のコメントと共に、これもHPにアップした



(学生が描いた脳のイメージメモ)



(脳の機能形態に対する質問の1例)

(上の四角囲いの図はその2枚)。脳のイメージメモには、「賢い人はほんまにしわしわ?」、「脳の血流ってどうなっている?」、「100%はたっていないらしい、100%はたらいたらどうな

る? 火事場の馬鹿力」などの疑問や、脳に対するイメージが書かれている。下の質問は「活性化している部分の脳では血流が多くなっているということを、テレビなどで聞くが、どういう仕組みなのか気になります」というものである(神経細胞が活性化するとその興奮が周囲のアストログリアに伝わり、アストログリアから血管拡張を促す分子が放出されることがわかっている)。

多くの若い人は、恥ずかしがって公の場では質問や意見を出したがらないが、こういうことを行なって他人の意見や疑問を共有すると、みな同じような質問を持っていることがわかるでしょう、と強調した。多くの学生は、討論の内容に興味を持って話に参加していたようで、グループごとの発表も活発であった。

3. 今後への課題など

(1) 先に「講義の内容は、学生が興味を持てるとような内容」と述べたが、教員と学生との興味や感受性の違いはどれくらいあるのか、どれくらいの解離があるのかは、調べたことはない。二十歳前の学生と還暦を過ぎた教員との感覚の解離は小さくはないと予想する。よく、「いいものを提供」という話を聞くが、大概はお年寄りのお仕着せであり学生の希望・要求とは一致していないと思っている。毎回、質問とともに講義に対する意見も記載できるようにしているが、小テストに付随して記名のせいか、大きく参考になるものは少ない。学生も、大学の講義ってこんなもの、と思っているのかもしれない。医学科の講義であれば、実習などで学生と接する機会も多いので、多少なりとも学生の声を聴くことができそれを講義に反映させることが可能である。こういった点は、非常勤

の講義では難しく、共通した悩ましさであると思われる。

(2) 上記の通り、「生物学的人間学」では、学生同士で話をする機会を設けた。学生は、それなりに楽しんでいただようで、講義終了後の授業アンケートにも討論に関連するポジティブな意見もいくつか含まれていた。一方で教員が、議論を深めたり方向づけたりする十分なスキルを持っているかと言われると、「お粗末様で…」と言わざるを得ない。教員側の今後の課題として、アクティブラーニングに関する本やFDなどがあれば積極的に活用してスキルを上げていきたいと考えている。

医学科での講義でも三大学の講義でも、学生と接していると様々な気付きがあり、いつまでたっても We learn by teaching を実感している。



(2) 法学の授業を担当しての雑感

(科目名：法学)

京都工芸繊維大学 助教

北村 幸也

平成 30 年度前期より、共同化科目の一つとして「法学」の授業が開講されることとなり、私（北村）がその担当者となった。本来であれば、何年度か継続して同じ授業を担当してからでないと、各大学の学生の傾向などについて何かを述べる根拠に乏しいのではないかとと思われるが、ひとまず、今年度に法学の授業を担当して考えたこと・感じたことなどを、個人的な備忘録も兼ねてここに報告しておくことにする。

(1) まず、授業の内容についていえば、特筆すべき工夫はしていない。何の変哲もない法学の概説講義をしたつもりである。授業における学生の能動的・主体的な活動も重要ではあるが、しかし「法学」という一つの学知の体系を初学者にも理解可能なように丁寧かつ効率的に示すには、伝統的な講義形式がやはり優れていると思う。毎回、教科書の該当箇所を指定して講義の予習・復習を促し、授業は教員が作成した配布資料（A4 用紙で毎回およそ 6～8 頁）に基づく 90 分弱の講義であったから、提供される情報量（文章量）がそれなりに多く、大変だと感じる学生も少なくなかったと推測されるが、それは最後に述べるとおり、期末試験の結果にも表れた。

ところで、共同化科目においては、異なる大学の様々な専攻の学生の相互交流を促すことも重要であると思われる。しかし、今年度の法学の授業では、授業中に学生同士で議論をさせるような機会を設けることはできなかった。予定の授業内容を全 15 回で消化するためには時間の余裕がほとんどなかったということもあるし、また、法学の分野における重要な論題は、人間や社会、国家にかかわる——学生にとっては「重い」——ものになりがちであり、それについて「では近くの席の人と話し合ってみましょう！」というふうにかジ

ュアルに（？）問いを投げるようなことは相当ではない、という配慮もあった。他分野の方々には意外に思われるかもしれないが、法的判断をその人の人格や世界観・価値観と切り離すことは困難である。だから、教室では、議論の中で相手の人格を否定するような不適切な発言がなされたりすることのないように教員が適切に議論をコントロールする必要があるが、少人数の演習科目ならばともかく、中規模以上の教室でそれを達成することは（少なくとも私には）難しい。しかし、だからといって、友人と授業の内容（講義の中で教員が発した問い）に関する議論をするように学生に促すことをしなかったわけではない。「授業」という枠を離れて、真剣な議論を恥ずかしがらずに戦わせることができるような、信頼のおける友達（「遊び友達」ではない！）を、どうにかして自分の嗅覚で見つけ出してほしい——というようなことは伝えたのだが、はたしてうまくいった人がどれだけいたかどうかは分からない。

(2) 次に、授業の目標についても、少し触れておきたい。法学の講義を、専門（基礎）科目ではなく教養科目として、主に 1 年生を相手に行う場合、その授業設計の仕方には、いくつかの可能性がある。たとえば、①大学生や社会人として生活する際に出会う様々な実生活上のトラブルに対応するのに役立つ法的知識を教えるような実利的なもの、②法的な知識ではなくむしろ法的なものの考え方（法学部教育においてよく言われる「リーガルマインド」）の習得を目指すもの、③法に関する歴史、思想、哲学などを説くアカデミックなもの、を挙げることができる。どの種類の授業も、様々な大学で実際に行われているものと思われるが、しかし①の授業は失礼ながらやや低次元で、テレビ番組か何かの企画のようでもあり、少

なくとも三大学の学生のレベルには相応しくない。また、③の授業は、そのような内容を好むタイプの学生も一部にはいるだろうけれども、多くの学生は「役に立たない」と感じて関心を抱きにくいのではないかと考えられる(ちなみに、法学部においてすら、法の歴史や哲学に関する科目は、資格試験の役に立たないなどの理由で、敬遠されがちである)。

そこで、私がこの授業で思い描いたのは、②のタイプの授業設計である。ただし、私の授業では、「法的なものの考え方」の「習得」を目標とはしていない。わずか半期15回の授業では、それは端的に言って無理だからである。そうではなく、この授業では「法的なものの考え方をする人々」の有り様を——教員自らがその一つのサンプルとなって——具体的に描き出し、受講者にはそれをできるだけ正確に「観察」してもらうことを目指した。そうすることで、ひるがえって、それぞれの学生が今後大学で学ぶ各専攻分野における特有の「ものの考え方」に対して敏感になってもらおうと考えたのである。もっとも、これもまた、それがうまくいったかどうかは分からない(そもそも測定が困難であろう)。私としては、授業を受けた学生が、たとえ今の時点では何も感じていなくても、何年か後に「そういえばあの授業で……」と思い出してもらえればうれしいのだが。

(3) 最後に、成績評価について。100点満点で期末試験を実施し、うち60点は法学分野の基本的な用語や原理・原則の意味を教科書どおりに説明すればよいという簡単な問題を3問、残り40点は、「法的なものの考え方とは何か」という問いについて、「法学以外の(任意の)分野におけるものの考え方」と対比しながら論じさせる趣旨の問題とした。後者の問題は、もちろん前記(2)

の目標設定に対応する出題である。特に1年生には少し難しすぎるかもしれない問題だったが、出題の趣旨を的確に理解し、限られた試験時間の中でよく考えられた文章を書いてくれた学生が2名いたこと(歴史学と法学の方法を比較した府立大の文学部歴史学科の学生と、現場の医師と法律家の思考の類似性を論じた府立医大の医学部医学科の学生)が非常に印象的であった。

成績を各大学別に算出すると、合格率(期末試験不受験者を除く)は、工繊大63%(19/30)、府立大85%(17/20)、府立医大100%(8/8)となり、平均点は、工繊大55.5点、府立大66.9点、府立医大80.6点となった。明らかに、工繊大の学生の出来が全体的に悪かった。他方、学科別にみると、府立大の文学部歴史学科と府立医大の医学部医学科の学生は全体的に点数が良かった。このことから推測するならば、この授業では与えられる情報量がやや多く、その大部分は文章で表現された情報であり、しかも法学分野の文章は表現が硬く古めかしいこともよくある、といった事情があったために、硬質な文章を読むことに抵抗感の少ない歴史学科の学生や、情報処理能力(多くの情報の中から重要な点を抽出する能力)の高い医学科の学生が比較的好成績を収めたということであり、逆に工繊大にはそのようなタイプの学生がかなり少なかったということではなかろうか。

もっとも、本を読み、講義を聴き、その要点をノートに整理して書く、といういわば基礎体力に属する部分がひ弱な学生が多いように感じられるのは、特に工繊大に限った話でもないであろう。焼け石に水かもしれないが、私の授業の中でも、「読書」や「講義」の楽しみ方と効用について丁寧に説明するような機会を設けておくべきだったかもしれない。来年度の授業の課題としたい。

(3) 多様性を体感する

(科目名：映画で学ぶ英語と文化)

京都府立大学 教授

野口 祐子



1 上回生対象の語学授業を設計する

筆者は平成 28・29 年度に三大学共同化授業の運営に関わったが、科目を担当したのはリレー講義「意外と知らない植物の世界」のみであった。今回、初めて 1 科目を自分でデザインし、授業に臨むことになったので、その経験を記すことにする。

筆者が平成 30 年度の後期に担当したのは、平成 29 年度から新たにスタートした上回生用の科目の一つであり、「学び続ける教養教育」を実践する科目群の一つとして位置づけた、外国語と文化を学ぶ科目「映画で学ぶ英語と文化」である。映画の英語スクリプトを読み、実際に映画を見てディスカッションする、という授業なので、定員は 30 名以下の少人数クラスである。

三大学から受講者があれば理想的だが、こればかりは年度によっても違うし、蓋を開けてみないとわからない。受講者は筆者が所属する京都府立大学文学部の欧米言語文化学科の学生がほとんどになるのではないかと考えていたが、府立大学からは文学部、公共政策学部、生命環境学部、工芸繊維大学からも複数の学域の学生が受講してくれて、この授業の目的である「多様性を体感する」ための条件が一つ整った。現在（平成 31 年 1 月末）、京都府立大学から 11 名、京都工芸繊維大学から 10 名がレギュラーに受講している。この科目は、教養科目の英語を 2 回生で履修し終えても英語を学び続けたい、それまでできれば楽しく学びたい、というニーズに応える科目として定着していくと思われる。残念ながら、府立医科大学からの受講者はゼロであった。

三大学共同化授業では、従来の教養科目・専門

科目の枠に収まらない内容の授業もデザインできるのが、教員にとっても学生にとっても魅力である。三大学に所属する教員には、今後ぜひ、これまでにない科目を提案してほしいと願っている。



2 本授業の目的

「映画で学ぶ英語と文化」では、受講条件が 3 回生以上なので、この単位が必要だからという動機ではなく、映画の英語を聴き取れるようになりたい、映画を通して文化を学びたい、という動機で受講している。だから「やらされ感」がないのが教員にとっては有難い。教える側も一石三鳥、つまり、

- 1 楽しみながら英語力が向上する
- 2 異文化を理解する
- 3 多様性を体感する

を実践できる場として授業に臨んでいる。実際、「楽しい」という感想もよく聞かれた。

授業には、教科書として映画総合教材『ラブ・アクチュアリー』（松柏社）を使用し、別に映画を 3 本用意して、各回の後半 15 分～20 分で部分的に視聴した。教科書には映画 *Love Actually* (2003 年、イギリス／アメリカ映画) の全スクリプトが掲載されているので、DVD は英語字幕にしておき、聴き取り、発音練習、グループ・ディスカッションを中心に授業を進めた。授業中に次回スクリプトを読む場面をあらかじめ視聴→スクリプトを予習→教室でスクリプトの内容や英語を確認→二人一組になってセリフを読み合わせ→もう一度映画の該当場面を視聴、という流れで授業を進めた。1 回目の視聴では聴き取れなかった英語が、スクリプトを読み、実際に発音したら聴き取れるようになった、という瞬間に立ち会える

のは、教員にとってうれしいものである。予習では必ず音読するように指示した。また定着のために内容聴き取りの小テストを6回行った。

受講者には、スクリプトを読んだ上でも、聴き取りはかなり難しかったと思われる。1回目の授業で英語字幕もなしで冒頭の場面を見せ、どの程度聴き取れたかアンケートを取ったが、「ほとんど聴き取れなかった」という回答が大方であった。字幕なしで洋画を観る経験がなかった人も多く、「これまでどれほど日本語字幕に頼っていたかがわかった」という感想もあり、英語を自力で聴き取ることへの意識づけができたと思われる。

聴き取りが難しくても毎回、授業を楽しんでくれたのは、一つには *Love Actually* という作品の力が大きい。幾つものエピソードが同時進行するこの映画は、話の展開が気になるし、若い人たちが関心を持って観られる映画だった。ただ、ほとんどの受講者は中・高・大学でイギリス英語に接する機会があまりなかっただろう。また、受験勉強や大学の授業で用いる英語の音声は、多くの場合、教材用にゆっくり、はっきり発音されているので、初めは映画のセリフの速さにたじろいでいた。それに、これまで授業で遭遇したことのない英語表現、スラングや、頻出するいわゆる“dirty words”にも面食らっていた。特に“dirty words”については会話で使用しないようにと注意した。

受講者に毎回、出席を取る代わりに提出してもらう質問・感想用紙から幾つかを紹介すると、

＊「自分で声に出して読んだ文章は聴き取りやすくなった。」

＊「映画を通して楽しみながら英語の表現を学ぶことができるので、普通に本を読むよりも身につけやすいように感じます。」

このような感想に励まされた。



3 多様性を体感する

三大学共同化授業のメリットは、様々なバックグラウンドの受講者が集まることである。本授業でも、同じ映画を観ても受け取り方が違う、注目する点が異なる、といった個々人の考え方の多様性を体験してくれた。

題材となる映画も、多様性について考えるきっかけとなる作品を選んだ。まず *Love Actually* を通して、文化の多様性、愛の形の多様性、話す言葉の多様性等について話し合った。



グループ・ディスカッション みんな後ろの席が好きです。

もう一つ、この授業のねらいは、映画のナイーブな視聴者に終始するのではなく、分析する目を養うことである。分析的に観ることで、多様な解釈が可能になる。主教材とした *Love Actually* は9.11以後の世界へのアンチ・テーゼとして製作されている。受講者にはその歴史意識も持って映画を見てほしいと伝えた。他に用いた映画は以下の3作である。それぞれについてグループ・ディスカッションを行った。

1『ミドルトン一家、ニューヨーク万博に行く』

(1939 年、アメリカ)

2『サウンド・オブ・ミュージック』

(1965 年、アメリカ)

3『チャップリンの独裁者』

(1940 年、アメリカ)

1 は 1939 年にニューヨークで開催された万博用にアメリカの大手家電メーカー、ウェスティングハウスが製作したドラマ仕立ての宣伝映画である。55 分と比較的短いので、3 回に分けてすべて視聴した。田舎町に住む一家が万博見物に行くという一見たわいないストーリーに、当時のアメリカのイデオロギーが凝縮されているのが面白い。ヨーロッパで第 2 次世界大戦が起きているにもかかわらず、画面には戦争の気配もなく、ひたすら白人中流家庭の価値観が賞揚されている。グループ・ディスカッションでは、映画の中で頻出する「機械化によって仕事が奪われる」という懸念など、今日の社会状況と重なる点にも注意が向いた。

2 はみんなが子どもの時から親しんできたミュージカルである。有名な歌の歌詞に注目した上で合唱した。その後、1938 年のオーストリアを舞台にしたナチス・モチーフが、1965 年のアメリカという地点からどのように描かれているかに注意を向けて視聴した。楽しげなミュージカルも深読みすると、描き方に込められた意図が見えてくることに気づいてもらうのがねらいであった。

3 は 1 と同時期にチャップリンが製作した、ヒトラーにパロディと批判で立ち向かった映画である。

さわりの場面を見せながら、有名な最後のファシズム批判のスピーチの英語を予習させ、最終回でその場면을視聴した。実は *Love Actually* の冒頭、ヒースロー空港の到着ロビーの場面で流れ

るナレーションが、このチャップリンのスピーチを意識して書かれているのではないか、というのが筆者のひそかな推測である。最終回でディスカッションの時間を取れなかったのが残念だ。

受講者の声を紹介すると、

＊「これまで映画を批評的に観るということがなかったので、良い機会となった。」

＊「洋画を、その時の背景などを考えて客観視するのが初めてなので、いろいろ考えながら映画を観れるのが新鮮だった。」

＊「ディスカッションで自分にはない観点を持っている人に出会えるのでよかった。」

1、2、3 の映画は、1938-39 年という時代をテーマにしたアメリカ映画であるにもかかわらず、それぞれの意図によって描き方が全く異なる 3 作を選んだ。授業の時間内でできることは限られており、消化不良にさせてしまった感もあるが、受講者には今後映画を観る際に、漫然と観るのではなく、時代背景や描き方にまで注意を向けるきっかけになってくれたらと願っている。



まとめ

たかが映画と思われるかもしれないが、これからの世界を生きる社会人として、英語力を身につけるのはもちろん、自分の意見を持ち、他者の立場になって考え、行動できる人になってほしいという願いを込めて授業を設計した。授業を終えた今、少しは意図が実現できたかと願う次第である。

(4)「読書感想文」で何を体験し育てるのか

(科目名:文芸創作論)

京都府立医科大学 特任教授

藤田 佳信

昨年度は「課題エッセイ<読書感想文>を読む」と題して、授業研究の報告書を書きました。今回は続きのつもりで、課題の意図と授業の目的・目標について報告したいと思います。

タイトルに<育てる>という表現を用いていますが、育てるのは、書く主体である受講生自身です。科目担当者の私は、サポート役にすぎません。課題エッセイの創作で、サポートする私は、次の3つの意識を育ててほしいと期待しています。

1. <読む>とは、作者とのポジティブな対話であると気づく。また時と空間を超えて、同じ文章を読む人の列に自分も加わっている、と実感する。(参加する、という意識を抱いてほしいです。人文学としての文芸の世界に入るためにも)
2. 読書感想文は、受講生それぞれの意見・考え思いを表現する大切な場だと実感する。
3. 読む自分が同時に、<読まれる側に回っている>という自覚を持つ。

3つめは、気づきにくい点です。読む自分が知らぬ間に読まれる側に立っているなど、受講生はすぐには理解も自覚もしてくれません。というのも、課題図書『檀山節考』なら、読まれているのは著者の深沢一郎なのですから。え？話が違くないじゃないの？と、驚く受講生が少なからずいます。

初めの内は、受講生は大抵、<感想文は感想文だ>と単純に思っています。そのため対象の作品を読み、何を思ったかをそのままつづります。常識的には、読まれるのは作品(あるいは作者)であり、受講生は読者に過ぎないということなのでしょう。その文章には読む人固有のテーマ、ぜひ

表現したいという思いがありません。

講義ではまず、創作であるための条件について話します。テーマとトピックの違いとか、構想(plot)をまとめ展開するとか、作品のタイトルとサブタイトル、読者とメッセージ、創作と文責、レイアウトなどについて。作家のエッセイを活用して、書く実践作業もします。基本的な条件はビジュアル化し、パワーポイントでスクリーンに映し出します。また機会あるたびに、図式化したモデルに立ち返って確認をします。

表現するとは、ことばを入念に選び、工夫を凝らしてレイアウトすることです。別個の文節なり文を、パラグラフとパラグラフを、それぞれ別個でありながら、互いに密な関係を結ぶように(思索を積み重ねて)並べます。俳句で、選んだことばを五七五のリズムで並べるように。あるいは別個の画像を組み合わせる、映画のモンタージュの要領でレイアウトします。

創作(表現)における重要なポイントは、プロットの展開(unfolding)と言えるでしょう。言い捨て・言い切り、ひと言で済まさず、考え・思いを展開する必要があります。順を追って見せてゆく、のですね。文章を構成する個々の単位が、互いに影響し合い、新たなイメージを次々と呼び起こすようにレイアウトできれば最高なのですが、難しいです。あるいはまた同時に、読者を意識し、読者に納得してもらう、読者に伝わるように隔々まで細かい配慮をします。

つづく講義では、書く手順の話をしてします。手順について意識するのは大切です。創作としての読書感想文は、感じ思ったことを、そのままに書くものではありませんから。もちろん読後の第一印象

象からスタートはしますが、まずは心(頭?)にうごめく生の感情など、ゴタゴタの片付けをしてからですね。

好きとか嫌いとか、内容についての賛否、文章の上手いヘタなど等、あれこれ感じ想うでしょうが、いきなり感想を書かないようにと指導します。まずはワンクッション置く。文芸作業としては、要約(150~200字ほど)を行います。誤読あるいは勝手な理解、をしないために。要約という土台の上に、自分のオリジナルな家を設計(plot)して建てます。中心の柱がテーマです。

ある文芸批評家が、批評とは<他人の作品をダシに使って自己を語る事である>と述べたそうです。そんな記述が実際あったとしての話。本科目の課題・感想文についても、そうなのでしょうが?受講生にたずねてみました。書いたものが、なんだか自己顕示欲の現れみたいでイヤですね。

<他人の作品をダシに使って自己を語る>という表現には、違和感があります。感想文を書く際に、まず対象の作品を読みます。読むのは、作者とのポジティブな対話だと私は話しています。それから感想を書くのに、自分のテーマ一つを探し当てるように求めます。自分のテーマを表現すると、自己を語ることになるのは避けられません。他者(読者)に向かって、自己を開示するからです。文章を読む自分が、知らないうちに読まれる側に回っているのです。

ものを書くのは、怖いです。自分の考え・思いが丸見えになりますから。そのためか意識的にせよ無意識的にせよ、ひとはものを書きながらあれこれ抵抗するようです。なんとか自分自身をさらけ出さないように。作文が難しい、率直に簡潔に書けない理由ですが、一つには、この心の抵抗の

せいではないかと思います。

近年、<フェイク>ということばをよく見聞します。5回目の講義だったか、「フェイク vs. 真実」の話をしました。真摯な態度で率直に真実(literary truth)を書く、という話です。他人に向かってウソを書くのは、硬いことばを使えば、虚偽行為です。自分をだますのは、自己欺瞞(self-deception)です。ヒトは嘘をつき、自己欺瞞に陥りやすい生きものらしく、精神分析の分野だけではなく、文芸でも大きな問題です。

文章で嘘をついてはいけない

これはその日の講義のしめくくり、スクリーンに浮かび上らせたパワーポイント・スライドの文句です。当たり前と言えば、当たりのことです。しかし昨今、世間というか、世界でそうとは決して言えない、深刻な状況になっています。スライドの文句は、もちろん他人をだますのは大いに問題ですが、書く人は、自分に嘘をついてはいけません、という受講生へのメッセージです。

上の警句を声に出したとき、顔を上げる受講生の姿がちらほら目に入りました。授業が終わってから、女子学生が個々にやってきて、声をかけてくれました。5回目にしてやっと、学生とことばを交わすことができました。中にひとり、私のネクタイをほめにきた女子学生もいます。それだけです。「そのネクタイ、オシャレですね」と、ひと言。光栄です。

本科目の最終目標は、オリジナルなエッセイ3編の創作で、ジャンルは以下です。

a. 読書感想文(深沢七郎『檣山節考』を読んで)

- b. 紀行文(日帰りのぶらり探訪エッセイ)
- c. 聞き書きエッセイ(昨年度までの身近雑記を、聞き書きエッセイに換えました。)

島デザイン工房・奥島肇さんのお世話になりました。記して感謝の意を表したいと思います。)

はじめの読書感想文は、11月末に提出済みです。年明けに、受講生が頑張って作った紀行文が集まりました。いま読んでいます。

課題の紀行文では、エッセイ執筆とは別に、新聞の紙面作りのようなレイアウトの作業もしてもらいました。トピック(題)と説明文、キャッチーな見出し、写真や地図などのイラストをそれぞれ用意し、本文とのバランスを工夫しながらレイアウトします。読者の目をひき、興味をもってもらえるように。

紙面のレイアウトは、作文(のレイアウト)とは異種の、編集(エディトリアル・デザイン)の仕事です。そんな異種の作業も今回はやってみよう、ということです。紙面作りそのものを楽しんでもらうのが、一番の目的です。

それからまた、編集は、自分の文章を他者の眼で読み直す方法の実践でもあります。創作は<これでよし!>と思えるまでに、何度も繰り返し読み直す必要があります。発信する前に、自分でも他者の眼で読み直すことができないか。その方法の一つが、紙面の編集です。編集作業をしている間は、効果的なレイアウトをする意識で、自分のエッセイを読むことになりますから。

本年度の報告書は、機構予算の大幅な削減等の事情によるページ数の制約があり、この辺りで摺筆致します。読み終えた受講生の紀行文や学期末締切りの聞き書きエッセイの感想は、また機会があれば改めて報告したいと思います。

(本年度もパワーポイントの作成&修正は、奥

(5) 反転授業による社会科教育の実践 －「君たちはどう生きるか」を教材にして－(科目名：社会科学の学び方)

京都三大学教養教育研究・推進機構 非常勤講師

児玉 英明

I はじめに 反転授業と個別フィードバック

リベラルアーツ・ゼミナール「社会科学の学び方」で最も大切にしていることは、多様な考え方を持った他者との対話である。その対話を促進する教育実践の工夫として、「反転授業」と「個別フィードバック」に取り組んでいる。

「社会科学の学び方」では、事前に、教科書の吉野源三郎『君たちはどう生きるか』の指定箇所を各学生が予習し、授業の前日に感想文を提出する。具体的には、日曜日の午後12時までに感想文をメールで提出してもらい、翌日の月曜日の授業で、個別に、即時フィードバックを行っている。

授業では三大学の学生がバランスよく混在するように、4人グループを組んでいる。5回目、10回目に席替えを行うことで、学生は異なるメンバーで構成される3つのグループを経験する。グループディスカッションでは、授業前日に提出した感想文「教科書のどの箇所が印象に残ったか」「なぜ、その箇所が印象に残ったのか」を各グループで共有する。各グループでは、毎回、ファシリテータの学生を指名し、感想の共有過程を、携帯式のホワイトボードにまとめながら進めていく。その後、教員が教科書の該当箇所を解説し、全体で議論したい論点を提示し、さらに対話を深めながら社会科学の視点を身につけていく。

ゼミナール型授業の対話を深めるために、著者は次の二点を心がけた。第一に、学生の経験に引きつけながら社会科学の視座が学べる平易な教科書を指定することである。第二に、個別フィードバックを取り入れた反転授業をゼミナールに組み合わせることである。

「反転授業」と「個別フィードバック」の二つの過程を丁寧に行うことではじめて、少人数制のゼミナール形式が活きてくるのである。

II 初年次教育として、主権者教育として

1回生を対象とした「社会科学の学び方」には、二つの役割がある。第一に、「高校の学び」から「大学の学び」への転換を促す「初年次教育」としての役割である。第二に、18歳選挙権の当事者である大学1回生を対象とした「主権者教育」としての役割である。

ここで想定している「高校の学び」とは、センター試験に象徴されるような「正答が一義的に定まる形式」の学びである。例えば、「下線部bに関して、第二次世界大戦後の国際通貨体制に関する記述として適当なものを、次の①から④のうちから一つ選べ」といった択一式問題を、繰り返し練習する受験勉強としての社会科である。どんなに作問に工夫を凝らしているとはいえ、正答が一義的に定まる形式に慣れ親しんでしまうと、政治経済に関する諸問題には「絶対的に正しい答えがあるはずだ」と思い込む弊害が懸念される。

教養教育には「一義的な正解の存在しない問題について、学際的な視点で物事を考え、多様な見解をもつ他者との対話を通して自身の考えを深めていく経験をする¹⁾」が期待される。また、時には、「社会の現実や人々の生き方が内包している矛盾に対して取って学生を向き合わせ、そうした矛盾について、『世の中とはそういうものだ』で終わらずに、なぜそうなっているのかを徹底的に考えさせること²⁾」も必要である。

つまり、初年次教育として、主権者教育としての役割を「社会科学の学び方」が担うのであれば、高校の授業では避けられていた一義的な正解が存在しない現代社会の諸問題を、グループディスカッションの教材として取りあげ、その問題をめぐり、多様な考え方を持った他者がいることを実感させることが大切ではないか。

III 個人的な経験と自発的な思考

『君たちはどう生きるか』は、主人公である中学二年生のコペル君の「個人的な経験」とそこから生まれた「自発的思考」を基に、社会科学的な視座を学ばせようとしている。コペル君の個人的な経験は、コペル君特有のものではなく、多くの学生が小学生、中学生の時に似たようなシチュエーションを経験しているものである。だから、感想文を書くときには、自分の記憶に残っている幼少期の出来事を振り返りながら、「なぜ、その出来事が大学生になった今でも印象に残っているのか」を、自分に問いかけながら文章にまとめる。

コペル君が中学生生活の中で直面する様々な場面に、読者一人ひとりが主人公として入り込みながら、自身の中学生の頃を思い出し、それをきっかけとして、自分の考え方や生き方を振り返ることができる。つまり、感想文を通じた自己内対話が、個人的な経験から出発した自発的思考を導く。

『君たちはどう生きるか』の第2章に、「浦川君のうちは豆腐屋さんでした。ところが、同級の生徒は、たいいてい、有名な実業家や役人や、大学教授、医者、弁護士などの子供たちでした。その中にまじると、浦川君の育ちは、どうしても争えませんでした³」という記述がある。吉野は、似たような家庭環境の者が集まるエリート校を舞台として描くことで、「コペル君の学校は多様性理解の場として機能しているか」という問いを投げかけている。このエピソードでは、社会における「貧困」「格差」、自分より弱い者への「他者感覚」という社会科学の視座が平易に問われている。

特定の進学校から、同質性の高い学生が集まる傾向の強い国公立大学において、学校という空間が多様性理解の場として機能しているかを考えさせることも教養教育の重要な役割だろう。

IV 概念を振り回さない

コペル君の「個人的な経験」とそこから生まれた「自発的思考」を大切にすることとは、言い換えれば、社会科学の抽象的な概念を振り回さないということである。例えば、先に取りあげた「貧困」という概念も、まずは自分の幼少期の具体的な体験に引きつけて考えてみるのが求められる。つまり、今までの人生を振り返り、そこで感じた様々な思いをもとにして、正直に考えていくことが『君たちはどう生きるか』の方法である。

コペル君は、親友の浦川君が三日間学校を欠席していることを心配して、浦川君の家を訪ねる。そこで、欠席している浦川君が家業の豆腐屋を元気に手伝い、油揚げを手際よく揚げている姿を見て感心する。コペル君は、浦川君の家を訪ねることによって、はじめて自分の家と他人の家の違いを自覚し、貧困という抽象的な概念を具体的に理解する。そして、コペル君は、貧しい友人を見下すのではなく、家業のために学校を休まざるを得ない境遇にある浦川君の家に通い、学校の勉強を心配する浦川君に授業の進み具合を教える。

このエピソードをきっかけとして、次のようなグループディスカッションを行った。「コペル君は豆腐屋を営む浦川君の家へ遊びに行くことで、『自分の家』と『他人の家』の違いを考えるきっかけを持った。自分の幼少期を振り返り、『自分の家』と『他人の家』の違いを考えるきっかけになった出来事について論じなさい」。

自分より弱い者の立場になって考える「他者感覚」を、幼少期のどのような場面で自覚したか。この他者感覚は、教養教育の目標である民主的市民の形成にとって欠かせないものである。なぜなら、民主主義が問い直される時代局面は、他者感覚が問い直される時代局面とも言えるからである。

V 他者との対話の姿勢

2018年12月現在、注目される時事問題は、沖縄県名護市辺野古への土砂投入である。沖縄県では、9月に政権与党の考え方とは異なる、埋め立て反対派の候補が県知事選挙で当選している。このように民意に食い違いが生じた場合、民主主義という観点から、我々はこの事態をどのように理解すべきだろうか。

「社会科学の学び方」では、新聞社説の読み比べを実施した。辺野古への土砂投入について、賛成の立場から『読売新聞』の社説「辺野古土砂投入 基地被害軽減を止めるな」⁴を取りあげた。一方、反対の立場から『毎日新聞』の社説「辺野古の土砂投入始まる 民意は埋め立てられない」⁵を取りあげた。一見すると、どの新聞社も同じような記事に見えていたことが、新聞社説の読み比べを経験することで、保守とリベラルといった軸を見出すきっかけにもなる。そのどちらに、より共感するかを一人ひとりが自覚することが、主権者教育には欠かせないだろう。

民主主義のあり方をめぐって意見が割れる時事問題を、あえて授業で取りあげ、賛成、反対の双方の立場から複眼的に検討する。偏向批判を恐れて、民主主義のディレンマを避けてしまったら、主権者教育は、模擬投票を学校で練習するだけの無味乾燥なものになってしまう。大切なことは、何となく分かったつもりでいる民主主義の根源的な問い直しである。

いま直面している社会問題に絶対的に正しい一義的な答えはない。そのことを理解し、考え方の異なる他者と、どこまで対話を重ねることができるか。自分とは考え方の異なる他者の存在に気付く、対話の姿勢を学ぶことが、教養教育においてゼミナール型授業を設定する意義である。

VI おわりに 民主主義と他者感覚の理解

教養教育の目標は『『民主的社会』とその豊かな展開を担う『民主的市民の形成』⁶である。

丸山眞男は、日本人の民主主義に関する理解について、次のように対比的に論じている。「西欧やアメリカの知的世界で今日でも民主主義の基本理念とか、民主主義の基礎づけとかほとんど何百年以来のテーマが繰り返えし『問わ』れ、真正面から論議されている状況は、戦後数年で、『民主主義』が『もう分かっているよ』という雰囲気であしらわれる日本と、驚くべき対照をなしている」⁷。

「民主主義とは何だろうか」と根源的に問い直される局面は、現代でいえば、基地と原子力発電所をめぐる問題である。これらは、「周辺」の特定地域に過重な負担を強いる一方で、そこから離れた「中心」の都市部の人々には問題意識が希薄である。この解消できない乖離が、民意が食い違う根本的な原因である。

民主主義が問い直されるということは権力から離れた周辺地域の人々の声を、その人々の立場になって理解しようとする「他者感覚」の問い直しでもある。「民主主義とは何か」「いま求められる他者感覚とは何か」という根源的な問いを、一体的に考える。この両者を不可分に問い続ける姿勢が、教養教育としての社会科学の役割だろう。

¹ 日本学術会議『回答 大学教育の分野別質保証の在り方について』2010年、30頁。

² 同上。

³ 吉野源三郎『君たちはどう生きるか』岩波書店、1937年、37頁。

⁴ 『読売新聞』2018年12月15日。

⁵ 『毎日新聞』2018年12月15日。

⁶ 日本学術会議『提言 21世紀の教養と教養教育』2010年、11頁。

⁷ 丸山眞男『日本の思想』岩波新書、1961年、18頁。

(1) 平成 30 年度京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会 委員名簿

平成 30 年 6 月

大学名	京都三大学教養教育研究・推進機構 運営委員会									
	担当副学長		リベラルアーツセンター		教育 I R センター		規約第 4 条第 2 項による者			
	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
京都工芸 繊維大学	副学長 (研究科長・ 学部長)	前田 耕治	基盤科学系 教授	人見 光太郎	センター長 電気電子工学系 教授	萩原 亮				
京都府立 医科大学	副学長	奥田 司	生物学 教授 教養教育部長	小野 勝彦	化学 教授	鈴木 孝禎	学生部長	田中 秀央	看護学科長	岩脇 陽子
京都府立大学	運営委員長 副学長 (教務部長)	石田 昭人	センター長 文学部 歴史学科 教授	岡本 隆司	生命環境学部 生命分子化学科 教授	織田 昌幸	教養教育 センター長	椎名 隆		
京都三大学 教養教育研究 ・推進機構			特任教授 播磨 弘				京都府 公立大学法人 三大学連携担当課長	河野 勉		

(2) 会議の審議状況

副学長会議 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
平成 30 年 5 月 22 日 (火) 午後 3 時 00 分～午後 4 時 00 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」3 階 研究ゼミ室 1	【協議・報告等】 (1) 両センター長の選考について (2) 明治 150 年大学等連携プロジェクトについて (3) 京都三大学学生企画講演会について (4) 共同化科目について (意見交換)
平成 30 年 9 月 20 日 (木) 午後 5 時 40 分～午後 6 時 50 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」3 階 研究ゼミ室 2	【協議・報告等】 (1) 平成 31 年度の予算、事業計画について (2) 平成 31 年度の各大学提供科目について (3) 三大学戦略ネットワークの更新について (4) 明治 150 年大学等連携プロジェクト事業への対応について (5) 共同化科目担当教員の授業実施に当たっての留意事項について
平成 31 年 1 月 18 日 (金) 午後 5 時 20 分～午後 6 時 15 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【協議・報告等】 (1) 平成 31 年度の予算について (2) 平成 31 年度の事業計画について (3) 三大学教養教育運営協議会について (4) 学生交流会について (5) 三大学教養教育共同化の課題について

□ 運営委員会 審議状況

開催日時	開催場所	審議事項
平成 30 年 6 月 15 日 (金) 午後 5 時 40 分～午後 6 時 40 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【開会】 (1) 平成 30 年度運営委員等の紹介 (2) 運営委員長を選任 (2) リベラルアーツセンター長及び教育 IR センター長選任の報告 【協議・報告等】 (1) 平成 30 年度の取組について (2) 平成 30 年度前期教養教育共同化授業の履修登録者の状況について (3) 教育 IR センターからの報告 (4) その他 ・ 明治 150 年大学等連携プロジェクトについて ・ 京都三大学学生企画講演会について
平成 30 年 8 月 1 日 (水) 午後 4 時 10 分～午後 5 時 20 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【協議・報告等】 (1) 平成 31 年度学年暦について (2) 宿泊研修について (3) 明治 150 年大学等連携プロジェクトについて (4) 教育 IR センターからの報告 (5) 山田洋次監督特別講義について (報告)
平成 30 年 11 月 19 日 (月) 午後 5 時 50 分～午後 6 時 55 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【協議・報告等】 (1) 平成 30 年度後期教養教育共同化授業の履修登録者の状況について (2) 平成 31 年度共同化科目について (3) リベラルアーツセンターからの報告 (4) 教育 IR センターからの報告 (5) その他 ・ 明治 150 年大学等連携プロジェクトの開催結果について ・ 三大学教養教育運営協議会について ・ 休講基準の見直しについて
平成 31 年 1 月 18 日 (金) 午後 4 時 10 分～午後 5 時 15 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【協議・報告等】 (1) 平成 31 年度共同化科目について (2) 共同化科目担当教員の授業実施に当たっての留意事項について (3) 平成 31 年度受講案内について (4) 平成 31 年度三大学教養教育共同化単位互換科目について (5) 平成 31 年度後期試験教室配当について (6) 平成 30 年度活動報告書の構成について (7) リベラルアーツセンターからの報告 (8) 教育 IR センターからの報告
平成 31 年 3 月 13 日 (水) 午前 10 時 30 分～正午 12 時 00 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」2 階 会議室	【協議・報告等】 (1) 平成 31 年度予算 (案)・事業計画 (案) について (2) 共同化科目担当教員の授業実施に当たっての留意事項について (3) リベラルアーツセンターからの報告 (4) 教育 IR センターからの報告

□ 共同化科目担当者会議

開催日時	開催場所	内 容
平成 30 年 11 月 12 日 (月) 午後 5 時 50 分～午後 7 時 30 分	教養教育共同化施設 「稲盛記念会館」1 階 106 講義室	【教育 IR センターからの報告】 アンケート結果と受講者動向その他について 【科目担当者からの報告】 ・ これまでの三大学共同化講義とのかかわり ・ 法学の授業を担当しての雑感 ・ 多様性を体感する 【意見交換等】 ・ 授業資料を学生が web からダウンロードできる仕組みについて ・ 授業アンケートでの学生からの意見について ・ 履修登録の抽選について ・ 初回授業と 2 回目以降の授業での履修登録者の変更について ・ 学生から積極的に意見を引き出す方法について

京都三大学教養教育研究・推進機構 授業アンケート

京都三大学教養教育研究・推進機構「授業アンケート（2018）」

このアンケートは、京都三大学教養教育共同化科目を受講する皆さんの意見・感想を今後の科目のあり方や実施方法の改善に活かすために行うもので、成績評価には一切関係しませんので、率直に教えてください。なお、集計結果の活用の際には、個人情報保護の観点から細心の注意を払います。

科目名

記入上の注意
○マーク例 良いマーク ● 悪いマーク ●
記入に際しては鉛筆かシャープペンシルを用い、間違った場合は消しゴムできれいに消してください。

I あなたの所属は、次のうちのどれですか。

京都府立大学	① 文学部	② 公共政策学部	③ 生命環境学部	
京都工芸繊維大学	④ 生命物質科学域	⑤ 設計工科学域	⑥ 造形科学域	⑦ 先端科学技術課程
京都府立医科大学	⑧ 医学科	⑨ 看護学科	⑩ その他（ ）	

II 学年をお答えください。

① 1 回生 ② 2 回生 ③ 3 回生 ④ 4 回生 ⑤ その他

III この科目の出席状況をお答えください。

④ ほぼ全て出席した（12回以上） ③ かなり出席した（9～11回） ② あまり出席しなかった（5～8回）
① ほとんど出席しなかった（4回以下）

IV この科目について、1 回あたり平均してどのくらいの授業時間外学習（予習・復習・情報収集・レポート作成等）をしていますか。

④ 120分以上 ③ 60分以上 ② 30分以上 ① 30分未満

V この科目を受講してどのような感想を持ちましたか。
次の各項目に 5 段階で教えてください。

	5 強く 思う	4 やや 思う	3 どちら とも言 えない	2 あまり 思わ ない	1 全く 思わ ない
(1) この科目や関連する分野特有の視点や手法を学んだ	⑤	④	③	②	①
(2) この科目や関連する分野の基礎的知識を修得した	⑤	④	③	②	①
(3) 世界の人々の多様な生き方に触れた	⑤	④	③	②	①
(4) 自らの生き方を考え、高い倫理観を培った	⑤	④	③	②	①
(5) 現代社会が抱える問題への関心が高まった	⑤	④	③	②	①
(6) 文献・資料などを検索し、読解する力が高まった	⑤	④	③	②	①
(7) レポートを書く力が高まった	⑤	④	③	②	①
(8) 論理的に思考する力が高まった	⑤	④	③	②	①
(9) 受講生や教員との議論を経験できた	⑤	④	③	②	①
(10) 自大学では学べない領域を学んだという実感があった	⑤	④	③	②	①
(11) 教員との双方向のやりとりがあり、授業に参加しているという実感があった	⑤	④	③	②	①
(12) 課題や小テストなどのため、講義時間外でこの科目に充てる時間が多かった	⑤	④	③	②	①
(13) 成績評価の方法や基準が明らかにされていた	⑤	④	③	②	①
(14) 授業内容に触発されて、関連分野をより深く学びたいと思った	⑤	④	③	②	①

自由記述欄（付け加えたいこと、あるいはこのアンケートに関する意見があれば、お書きください）

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

京都三大学教養教育研究・推進機構 1 年次生アンケート

京都三大学教養教育研究・推進機構(2018 年度)

三大学教養教育研究・推進機構 1 年次生アンケート

(番号の後に * 印がある問は、必須回答項目です。)

このアンケートは、三大学教養教育共同化科目全般について、1 年次の受講生の皆さんからの意見や要望を集約する目的で、授業アンケートとは別に行うものです。ご協力をお願いします。

問 1. 三大学教養教育共同化科目（以下、共同化科目）の履修状況について教えてください。

問 1-1. 履修登録の初めに第 1 希望として提出した科目数は何科目ですか。前学期・後学期別に教えてください。

問 1-1-1* 前学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3]

問 1-1-2* 後学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3, 4]

問 1-2. 実際に履修登録した科目数は何科目ですか。前学期・後学期別に教えてください。

問 1-2-1* 前学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3]

問 1-2-2* 後学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3, 4]

問 1-3. 合否にかかわらず最終評価（試験やレポートなど）を受けた科目数は何科目ですか。前学期・後学期別に教えてください。

問 1-3-1* 前学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3]

問 1-3-2* 後学期（ただし集中講義を除く）[0, 1, 2, 3, 4]

問 2*. 履修登録時の抽選についてどう思いますか。[3. 現状でよい 2. どちらともいえない 1. できればなくしてほしい]

問 3. 前学期・後学期いずれかに共同化科目を履修登録した方にお聞きします。共同化科目の履修登録科目を選ぶときに、以下の問 3-1～問 3-5 に挙げられているものは、それぞれどの程度役に立ちましたか。次の 5 段階で教えてください。[5. とても役に立った 4. 役に立った 3. 少し役に立った 2. 役に立たなかった 1. 利用しなかった]（共同化科目を履修登録しなかった方は問 6 にお進みください。）

問 3-1. 「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」（オレンジ色の冊子）[5, 4, 3, 2, 1]

問 3-2. 上の問 3-1 で 3～5 と答えた人は、さらに問 3-2-1～問 3-2-4 に教えてください。それ以外の方は問 3-3 まで進んでください。

問 3-2-1. 科目の概要 [5, 4, 3, 2, 1]

問 3-2-2. 学生へのメッセージ [5, 4, 3, 2, 1]

問 3-2-3. 授業目的区分 [5, 4, 3, 2, 1]

問 3-2-4. 上の問 3-2-1～問 3-2-3 以外で役に立った部分があれば書いてください。[]

問 3-3. シラバス [5, 4, 3, 2, 1]

問 3-4. 先輩や友人などの他の学生からのアドバイス [5, 4, 3, 2, 1]

問 3-5. その他に役に立ったものがあれば書いてください。[]

問 4. 履修登録時に第 1 希望の科目を選んだ主な理由を、次の中から 3 つまで選んでください。

[1. 興味があったから 2. 必要だから 3. 学びがよいある科目と思ったから

4. 単位が取りやすそうだったから 5. 好きな分野だから 6. 知らない分野だから

7. 自大学提供科目だから 8. 他大学提供科目だから 9. その他 []]

京都三大学教養教育研究・推進機構(2018 年度)

問 5. 今年度履修した共同化科目の満足度を、科目ごとに 5 段階で表すとき、満足度の最高値と最低値を教えてください。

問 5-1. 満足度の最高値 [5, 4, 3, 2, 1]

問 5-2. 満足度の最低値 [5, 4, 3, 2, 1]

問 6. 今年度の共同化科目の内容・構成についてどう思いますか。

問 6-1*: [1. 現状でよい 2. 改善・検討を望むことがある]

問 6-2. 問 6-1 で 2. を選んだ人は、具体的な意見や提案などを自由に書いてください。

問 7*: [工織大生及び府大生対象] 来年度、共同化科目を履修しようと思いますか。

[5. ぜひ履修したい 4. 履修したい 3. 履修するかもしれない 2. わからない 1. 履修しない]

問 8. 前学期・後学期いずれかに共同化科目を履修登録した方にお聞きます。共同化科目の履修を通じて、他大学の学生と対話する等の交流の機会はどの程度ありましたか。授業日以外の交流も含めて、前・後期別に、延べ回数で教えてください。(共同化科目を履修登録しなかった方は問 10 に進んでください。)

問 8-1. 前学期 [4. 7 回程度以上 3. 3~6 回程度 2. 1~2 回程度 1. なかった]

問 8-2. 後学期 [4. 7 回程度以上 3. 3~6 回程度 2. 1~2 回程度 1. なかった]

問 9. 共同化科目受講のために教養教育共同化施設「稲盛記念会館」を利用した方にお聞きます。

問 9-1. 建物や設備に対する満足度を 5 段階で教えてください。

[5. とても満足 4. やや満足 3. どちらともいえない 2. やや不満 1. とても不満]

問 9-2. 共同化科目受講日に自習室を利用しましたか。

[5. ほぼ毎週 4. 2 週に 1 回程度 3. これまで数回程度 2. 利用したことはない 1. 自習室を知らなかった]

問 9-3. [工織大生対象] 共同化科目履修のために京都工芸繊維大学から「稲盛記念会館」へ移動している方のみ教えてください。それ以外の方は、問 10 に進んでください。

問 9-3-1. 移動のための(通常の)交通手段は何ですか。 [1. 自転車 2. 徒歩 3. 地下鉄 4. その他]

問 9-3-2. 通常、共同化科目の履修後に京都工芸繊維大学へ向かいますか。 [1. はい 2. いいえ]

問 9-3-3. 2 つのキャンパスで受講することに関する意見を自由に書いてください。

問 10. 自由記述欄(その他の意見や要望があれば書いてください。)

以上です。ご協力ありがとうございました。

編集：
発行：



京都三大学
教養教育研究・推進機構
Institute of Liberal Arts and Sciences

所在地：〒606-0823 京都市左京区下鴨半木町1番5
教養教育共同化施設「稲盛記念会館」内

T E L：075-703-4925

F A X：075-703-4979

H P：<http://kyoto3univ.jp/>

発行日：平成31年3月

デザイン：株式会社 谷印刷所